「定年留学」してみませんか？

60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ

ま　え　が　き

だれもが迎える定年。今、定年後の生き方がさまざまな角度から語られている。「定年論」とはつまるところ「人生論」でもある。自分の老後をどう生きていくかの「生き方の哲学」となろう。

人生 80 年代。定年は今やゴールではなく、豊かな可能性をはらんだ次の人生のスタートラインとも言える。「余生」などというものではなく人生そのもの。場合によっては、それまでの人生を越えたものにもなり得よう。

そうであれば、老け込んでなんていられない。そのためには、好奇心、想像力、感動する柔軟な心、挑戦の姿勢が必要になってくる。やりたいことがあるか、行きたい所があるか、会いたい人がいるか、時々、点検してみるのもよいと思う。

人それぞれ、百人百様の生き方があり、自分に合った道を進めばよいが、私はその一つとして「留学」をお勧めしたい。今述べたことをそのまま体験していくからである。何歳になっても学び続けるところには、前向きで新鮮な人生がやってくる。知的好奇心、向学心を抱き続けることは、精神の若さを失わない秘訣である。新しいことにチャレンジすることは、ボケ防止にも最適となる。

学ぶことに年齢はない。しかも、「海外」という、これまでとは全く新しい世界に飛び出したとき、冒険も苦労もあるが、得るものも想像以上に大きい。文化や宗教、伝統の違う仲間と話し合うだけで、世界が大きく広がる。若い学生との議論は大いなる刺激にもなる。

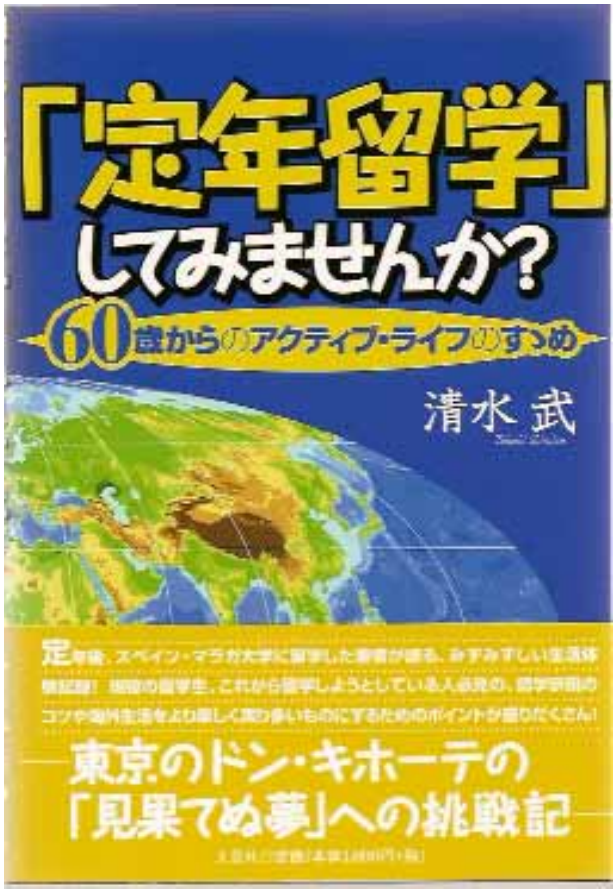
青春期に、経済的または他の理由で、留学したくても出来なかったが、今ならできる環境にある人もいると思う。定年後は“私が主人公”である。自分でどのようにも人生を演出できる。

「愚者にとって老年は冬である。賢者にとって老年は黄金期となる」との言葉もある。老いを人生の下り坂と見るのか、上り坂と見るのか。いくつになっても「いよいよこれから」の心が大切なのだ。人生に定年はない。

伊能忠敬が天文学の本格的な勉学を始めたのは、隠居した後の 52 歳の時であった。人生 50 年と言われていた時代である。先生は 19 歳も年下の高橋至時だった。以来、72 歳まで測量を続け、日本全国の地図を完成させた。

福沢諭吉は、開国まもなくの日本で「学問のすゝめ」を社会に問うた。この大先哲を引き合いに出すのも恐れ多いが、今、誰もが気軽に海外に出られる“第三の開国”時代に、ロング・ステイから更に一歩進めた、海外留学を呼びかけたい。

私も今、南スペインのマラガ大学で、日々、実に新鮮で刺激的で貴重な体験をしている。その留学体験と、生活の中で体験、見聞した生のスペイン事情を、後に続く方の参考にとまとめてみた。「60 歳からのアクティブ・ライフのすゝめ」――あなたも是非一度、想いを練ってみてください。



＊ご案内

本書は 2003 年 8 月、文芸社より出版されています。

ISBN4－8355－6148－１　定価（本体 1,000 円＋税）

お近くの書店から申し込み、またヤマト運輸のブックサービスからもご注文できます。（０３－３８１７－０７１１）

また電子本にもなっており、次のＵＲＬから立ち読み（無料）、ダウンロード（500 円）もできます。

http://www.boon-gate.com/02/

このホームページでは「各地を訪ねて」の項のみ、別ページ「飛行機に乗ったドン・キホーテ」で紹介しております。

目　次

ページ

まえがき　1
留学への夢　5
なぜスペインへ？　3

学生生活　第 1 報 (6 月)　7
大学の初日にストライキに遭遇
まず、クラス分けの試験から
シエスタの習慣に慣れる
時差に体調を合わせつつ
多様なクラス仲間に刺激される
老いてこそパソコンに挑戦！
研究発表に表れるお国柄

学生生活　第 2 報　迷信と諺　15
諺の豊かな国スペイン

学生生活　第 3 報(7 月)　17
一つレベルが上がったが・・・
ビクティマ(犠牲者)を名乗り出る
「スペインと日本の文化・習慣の違い」
時間に対する感覚の違い
しぐさの違い
言葉の構成の違いと「謙譲」の文化について
“ 一人の女性 ” をめぐるジョーク
「エッ　日本じゃキスしない！？」

学生生活　第 4 報(9 月)　25
研究発表はゴミ処理問題
なぜ犬の糞を片付けないの？
期末試験「やったネ！タケシ」
ＥＵがもたらす未来の可能性

ページ

学生生活　第 5 報　クラス仲間を我が家へ招待　30
クッキングスクールの成果を今
海外で寿司握りの “ 初体験 ”
女子大生を歓迎のキスで
“ ギター留学 ” の練習を披露

学生生活　第 6 報(10～12 月)　34
日本人にはハンデが必要？
“ 我がドン・キホーテ ” を語る
発音は英語よりやさしい？
俳句を生み出す日本の風土と
ＤＥＬＥ(スペイン語試験)に挑戦
四季もいつしか移り変わって

学生生活　第 7 報(１～3 月)　41
兄弟が揃ってスペインを訪問
仏教についてクラスで語る
仲間たちの人生模様
お世話になった先生を我が家に招待
「定年留学」の同志もいた！

各地を訪ねて――　47
（以下は「飛行機に乗ったドン・キホーテ」のページをご覧ください）
マドリード
セゴビア
トレド
グラナダ
セビリア
ジブラルタル
バルセロナ

コスタ・デル・ソルの生活　48
「年間 300 日が晴天」
食材は豊富、値段も安い
便利な足、バスとタクシー
ユーロ導入で物価上昇か？
「郷に入ったら郷に従え」
小さな小さな“民際外交”
トレモリーノス消防署訪問　52
署長、副署長が熱心に応対
新庁舎に大阪消防署のエンブレムを
「白い村」ミハスを訪ねる　55

伴侶、そして留守家族のこと
「コスタ・アミーゴス」の会が発足

主婦の目に映ったスペイン

私の語学取り組み体験　61
34 歳で初めてスペイン語に取り組む
語学は「やる気」と「根気」以外にない
50 歳を過ぎて再び英語に挑戦
定年からスペイン語の完成を目指す

留学実現のために　64
留学の準備
入学の準備
お金について
状況に合わせた携行品を
現地での諸手続き
楽しい留学生活へのヒント
勇気を持って発言しよう
現地に溶け込む努力を
旅に出て見聞を広める
健康管理に留意して
すでに飛鳥時代から留学生が

あとがき　73

留学への夢

定年後のロング・ステイ(海外長期滞在)が静かなブームになっている。「年金で楽しい海外生活」――大いに結構だと思う。時代は変わって今は、少し無理をしてでも子供を海外留学に送り出す親が多くなった。もう 40 年以上も前、私の高校時代には、留学なんて夢のまた夢、都会の超優秀生がフルブライト留学をできる、といった話を聞いていたのみだった。

アメリカの家では水道からお湯が出る、ロサンゼルスにはハイウェイがある、といった社会科の教科書に写真入りで出てくる生活も、全く別世界での出来事だった。

１ドル 360 円。それも自由に外貨が手に入らない時である。あれから日本と世界の環境は変わり、今１ドル 120 円前後(ユーロもほぼ同じレートにある)。“ 国際化 ” の波に乗って、誰でも海外に行かれる時代だ。日本経済の高度成長の中で、モーレツに働いてきた現在の親たちがその力になってきたのである。

留学――こんな良いものを子供たちだけに味わわせておいてよいものだろうか。自分は苦労したスネをかじられただけで、更にまだ大きくなった子供の面倒を見ようとしている親も多い。これまで家族を支えるために必死で働いてきた父親族も、少し人生を振り返る余裕のできた定年後は、せめて青春時代に出来なかった夢を実現しようと考えても責められる理由はないだろう。

思えば、私自身、多感な高校時代、不測にも母校が火災で焼失してしまった。不備な仮校舎での授業と、受験準備のため、クラブ活動も十分には出来なかった。楽器を買えるような家計でもなかった。高校卒業後は、今度は母が病気で倒れ、経済的な事情から大学もサークル活動に参加するほどのゆとりは無かった。今、スペイン語の勉強のほか、ギターもテニスも、当時クラブやサークル活動でしたくて出来なかったことをすべて、しかもそれを海外でやりながら、まさに第二の青春まっただなかを実感している。

幸いなことに、真面目に定年まで働いた日本人の年金は、ほぼ誰でもが(先進国の大都市を除く)海外で生活を出来る金額になっている。そこで、大切なのは、海外でどういう生活をしていくかである。ただ楽しいだけでなく、そこに何かの目的、創造的なもの、または社会に貢献できるものがないと、人間の本当の満足はないと思う。その一例が「定年留学」ともいえるだろう。

定年後は、Having でなく　Being が大事なのである。財産や貯金を持っているより、今、何をやっているかが問題。財布にいくら入っているかが問題ではない。心にどんな夢を描いているかが問題なのである。

思い切って飛び出せば、思っても見なかった世界が開けてくる。残りの人生が充実されてくる。”Seniors be ambitious!” “ 熟年よ大志を抱け ” である。必要なのは、人生に広い視野を持つこと、それに勇気と周囲の理解であろう。

留学にあたって、言葉が出来ることに越したことはないが、そうした状況になくても、

まず、“ 語学留学 ” から始めても楽しい人生が開けるだろう。いわゆるＡＢＣから教えてくれるクラスもある。　私も多くのケースを見、知っている。私自身は、幸いにも仕事の関係で、スペイン語と英語がなんとか操れるようになったが、スペイン語については、34 歳の時、全く初歩からの挑戦だった。また、英語は高校、大学と人並みの勉強をしてはいたが、これも本格的に取り組み始めたのは、必要性が生じた 50 歳を過ぎてからであった。“ やる気さえあればどこからか開けてくる ” というのが、体験から来る実感である。

また、必ずしも学問的なものでなくても、スペインを例に取れば、ギター留学、絵画留学、フラメンコ留学だってある。すべては、まず、未来に夢を創ることから始まります。

なぜスペインへ？

私は一昨年、定年を迎えるにあたって、これまでの体験、積み重ねを最も効果的に生かしながら、所期の人生目的を達し、社会にも貢献できる道について考えた。

かつて聖教新聞のパナマ特派員として各国を回って感じたこと、それは、ラテン・アメリカの文化の原点は、すべてスペインである、とのことだった。以来、いつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいうべき「ドン・キホーテ」を究めてみたい、との夢を抱いていた。そして、10 数年前、通産省から、年金生活者が海外で生活を、との「シルバー・コロンビア計画」が出された頃から、計画を少しずつ練ってきた。

いよいよ夢の実現へ踏み出すところまで来た。今回は「社命」ではない。「自らの意志」による海外である。南スペインのコスタ・デル・ソルに住み、マラガ大学に留学、これからの人生をダイナミックに考えていきたい。

ここで語学を更に深め、スペインまた世界の各地をまわりたい、と思っている。大風呂敷を広げるようだが、「見果てぬ夢」に挑戦する”Don Quijote de Tokio”(東京のドン・キホーテ)だったら許されよう。定年退職者の一つの試金石に、また、若者への啓発のきっかけになっていければと思う。

場合によっては、たまたま恵まれた者の勝手な発言と思う方もいるかもしれない。それでも、世の中にはこんな人生、考え方もある、ということを知っていただくのも無意味ではないと思う。私の場合、幸い周囲の理解もあって、ちょうど一年間の準備期間を経て、昨年 5 月初めに、マラガの近くのトレモリーノスに妻と共に移り住むことが出来た。生活に慣れるまもなく、翌 6 月からは大学のクラスが始まった。

以下はその後の学校生活を綴ったものである。後半部分では、スペイン各地を訪ねた時のリポートと、現地の文化事情等も紹介している。これも広い意味での留学生活そのものだからである。随所で自身の体験を引用しているが、必ずしも私のやり方がすべて良いということではない。その個人体験から、今度はご自分にあった何かをつかみ、普

遍していっていただければとの思いなのです。

スペインを舞台にしたヘミングウェイの名作「誰がために鐘は鳴る」は、三日間の短期間に起きたことに焦点を絞ったことで印象的なものとなった。私の記録は、その名作家の手法のみを拝借、一番印象の強い最初の三日間を詳細に、後はポイントを絞った形でまとめてみた。

学生生活　第１報　(6 月)

大学の初日にストライキに遭遇

６月３日(月)　快晴

06：30　大学に通う初日。張り切って起床。外はようやく明るくなりかけたところである。

07：15　朝食。5 月 7 日に渡西してからは二人で朝食を作ってきたが、これからは妻に頼むことにする。

メニュー：ごはん、味噌汁、ハム、トマト、オレンジジュース。米はスーパーに行くと 5 種類くらい売っている。その中から比較的、日本米に近いものを選ぶ。主流は細長く、炊くとポロポロになるパエジャ用の米である。

味噌はスペインには無いと聞いていたので、日本から持ってきた。具にはたまねぎ、ナス、インゲン、日によってはキャベツやジャガイモが入る。ナス、きゅうり、ピーマンなどは日本の採種用ほどに大きいが、結構やわらかくておいしい。値段は、日本の半分以下である。

07：50　ＲＥＮＦＥ(スペイン国有鉄道)のトレモリーノス駅へ。家(賃貸アパートの 5 階)から徒歩 4 分のところだが、初日なので大事を取って早めに出た。すぐ近くにあるコンクリートの長い階段を下りて、バス道路を横切るともう駅である。

始業は 9 時。電車は 8：04 発でマラガセントロ駅に 8：30 に着く。そこから歩いてちょうど 10 分の距離なので十分なゆとりがある。

トレモリーノス駅（ホームは地下にある）

――と思いきや、駅に着くと改札口に掲示があった。人もパラパラ。なんということか！きょうのこの電車と夕方の 1 本の電車に限って、ストライキで運行停止だというのである。電車は３０分間隔。次の電車では遅れてしまう。同じ元労働者としては理解は出来るが、外国で自分がその直接の犠牲者になると、やはりいろんな思いが出てくる。

幸いにもここにはバスの便もある。慌ててバス停に走っていく。同じ状況下にある人だろ

うか、すでに 20 人ほどが列を作っていた。そこでまた市民の面白いやりとりを目撃することになった。

地面を磨く回転ブラシを持った清掃車がやってきた。併行して、ホースから放水して歩道を清掃する係りもやってきた。強い水圧は、すべての泥やごみを洗い落とし、歩道はぴかぴかになっていく。だが、勢い余った水はそこに並んでいる人に飛散しないとも限らない。(実際には飛ばなかったが)待ち乗客の年配壮年の一人が大声で言った。

「なんで人が多く出てくる 8 時ごろになって作業やってるんだ。そんなのはまだ人のいない 6 時ごろまでに終わっているべきじゃないか！」

ムッとした作業員は、ホース口を彼に向け――いや、向けないで――言い返した。

「そりゃ、こっちだってそうしたいさ。だけど順序というものがあるんだ。まだ他にもいっぱい作業をする箇所もあるんだぜ」

他の待ち乗客は、ニヤニヤしているもの、ニコニコしているもの、無関心を装っているもの等まちまち。どんな世界でも、立場ってものがあるのだろう。

08：15　遅れてきたバスにようやく乗り込む。運転手から切符を購入。マラガまで片道 89 センティモス(0.89 ユーロ)。ミニ・コンピュータから出てきた切符には切符番号、料金、購入日時が分単位まで印刷されている。到着時間が心配で、隣の席に座った 60 前後の壮年に聞いてみる。

「渋滞の状況次第でしょう。きょうは電車がストで振り替え乗客も多いから、いつもよりは時間がかかるかもしれないね」といやなご託宣。だが幸いにも、くだんの壮年の予想は外れた。渋滞も少なく、なんとか 9 時前には大学に滑り込むことが出来た。

まず、クラス分けの試験から

09：00　秘書室で「夏季コース」の受付を済ますと、まずクラス分けのための筆記試験を受けることになった。約 90 人。見たところ、ヨーロッパのほとんどの国とアメリカ、そしてアジア系が少し。

マラガ大学。正式には Universidad de Malaga, Cursos para Extranjeros de Español（マラガ大学付属外国人向けスペイン語コース）。校舎はＲＥＮＮＦＥマラガセントロ駅から、幅 15 メートル以上もある歩道を歩いて約 10 分。

地階と高天井の 2 階建てで、10 人から 20 人用の教室と大教室が計 20 ほどある。月曜日から金曜日まで 1 日 4 時間の集中授業。授業料は月約 300 ユーロ(1 ユーロ 120 円として約 36,000 円)。ここが終わった後に自分が入ろうとする文学部などの校舎は、マラガ市のやや郊外にある。

筆記試験は文法を中心とした 60 題の質問。続いて別室で一人ずつ会話の面接試験。自己紹介から始まり、なぜスペインに来たのか、スペイン語との関係、マラガが好きか、昨日し

たことを簡単に述べよ、といった質問。私は、34 歳から初めてスペイン語に取り組んだこと、聖教新聞パナマ特派員時代の体験、将来、セルバンテスの「ドン・キホーテ」を勉強したい、といった内容を伝えた。

ふだんは午前９時から午後１時までが授業の時間帯だが、この日はこれだけで終了となった。

10：30　マラガセントロ発の電車に乗る。トレモリーノスまで片道 1.10 ユーロ。往復だと 1.65 ユーロとかなりの割引になる。８センチ×5 センチの大型の切符。表は赤色の都市の絵をバックに、区間、料金、発売日時分が印刷されている。裏は、切符番号、「料金に税金が含まれていること」「車内では禁煙」、といった文字と磁気用の線がある。

乗客の半分近くは、このコスタ・デル・ソルのリゾート地で生活をしている外国人。国柄も多彩なら、車内で話している言葉もスペイン語のほか、英語からドイツ語、フランス語、北欧の言語と多様である。注意事項を書いた車内の掲示も、西、英、独語で書かれ、わかりやすいように、各文の初めにはそれぞれの国旗のカットが入っている。

途中で車掌が検札に来た。切符なしで乗った場合、全線の料金の 2 倍を払うことになる。車掌は差し出した切符にボールペンでチェックを入れていった。

11：00　トレモリーノスの駅の公衆電話から妻に連絡。一緒に買い物をするために待ち合わせることとする。家に電話が入って便利になった。実は、この電話も前週の金曜日に入ったものだが、設置までが大変だった。電話局の係りが「××日の××時に」と設置を約束しても、待てど暮らせど来ない。「都合できょうは行かれなくなった」との連絡もない。こちら、臨時の携帯電話があり、番号も知らせてあった。その後、3 回の催促でようやくついたものだった。

待ち合わせの間に、カフェテリアでコーヒーを一杯。1.10 ユーロ。落ち合うと妻はスーパーへ食料品の買い出しに、自分は授業用の文具品を買い、取引銀行（ＢＢＶＡ）へお金の引き出しに行く。今年からスペインも完全にユーロ経済に入ったものの、普通預金の通帳にはユーロと元のスペイン通貨のペセータと両方で記帳されていた。

13:00　昼食。パン、牛乳、ハム、サラダ等。心なしかパンも牛乳もハムも日本のものよりおいしい気がする。特にハムはスペインの特産で、スーパーには 20 種類ほど並んでいる。それをその場で必要なだけスライスしてもらったものは特に新鮮でおいしい。

13：30　銀行の契約書、電話の使用説明書を辞書を引き引き確認していく。専門用語が多く、なかなか難しい。

シエスタの習慣に慣れる

14:30　30 分間ほどシエスタをする。自分はこの習慣に慣れてきたが、妻は、夜が寝られなくなるからと起きたまま。わかりつつあることは、シエスタは決してスペイン人のレイジー

さを表徴しているものではない、ということである。特に南スペインのアンダルシア地方では午後 2 時頃から 5 時頃の間は、強烈な太陽が照りつける。日本の真夏の正午から 3 時ごろの感じである。だからこの間は、家の中でシエスタをして(もちろん、しない人もいる)、その後からの仕事に備えるのだ。

仕事の時間帯も、業種によって異なるが、一般的には、朝 8 時半または 9 時から午後 2 時までと、午後 5 時から午後 8 時または 9 時までといったケースが多い。特に南スペインの人にとっては、まさに自然環境に合わせた生活リズムの知恵なのである。

16:00　スペイン国内、また日本のお世話になっている人への手紙を書く。
18：00 書いた一部の手紙のコピーをとりに近くの文房具店へ。B5 の用紙はここにはなく、すべてＡ４サイズとなる。

次いで、トレモリーノス郵便局へ。ここはさすが朝８時半から夜８時半まで、シエスタ抜きで、常時誰かが受付にいる。この市民へのサービス精神は評価できよう。国内マドリード向けの手紙が１通 25 センティモス（0.25 ユーロ：約 30 円)。

引き続き、トレモリーノスの駅で１か月分の定期を買う。定期といってもいつもの切符にパスポート番号を打ち込み、料金、期間、区間を表示したもの。１ヶ月 25 ユーロ。残念ながら学割はない。

帰り道、自分もスーパーに寄り、夕食は肉料理だというので、赤ワインを買う。スペインは世界第３位のワイン生産国。赤、白、ロゼと 40 種類くらい並んでいてあまりにも多く選び難い。安いのは普通瓶(日本のスーパーにある小型の瓶は無い)で 1.3 ユーロから、高いので 8 ユーロから 13 ユーロくらい。これまでの経験だと、1.3 ユーロのでも十分よい味がするし、8 ユーロのものであれば、まろやかでこくのある日本の 2〜3000 円級の香りと味がする。こちらは 5 ユーロのものを１本買った。

フェリアでのワインの試飲

スーパーの出口で新聞も買う。全国紙、地方紙、外国紙(英語、ドイツ語、フランス語等)あり、スペイン語のものは 0.8 ユーロから 1 ユーロほどである。どれもページ数が 30〜60 ページと多い。自分は、この地方で最も売れているという［ＳＵＲ］(「南」との意)を買い求めた。

19:00　夕食。牛肉のステーキ風焼き、トマト、レタス、ナスとたまねぎ炒め、それにスープとワイン。肉の味はいいが少々硬い。ベランダからは遠くに地中海が見える。

20：00　5 リットル入りのポリボトルをさげて水汲みに行く。外はまだ太陽が燦燦(さんさん)と輝いている。アパートから 300 メートルほどのところに泉のようになった特別の水道蛇口があり、「飲料水」としてその成分や使用規則を書いた掲示がある。近所の人、あるい

は遠くから聞きつけて車で水を汲みに来る人もいるようだ。

スペインの水道水は、基本的にはそのまま飲めるものだが、スーパーでは大きなボトルに入ったミネラルウォーターを置いてあり、かなりの需要がある。1.5 リットル瓶で 0.5 ユーロ。1 日に 2 本くらいは使うから、結構の経済の節約になりありがたい。昔、イザヤ・ベンダサンが、「水と安全をただと思っているのは、日本人くらいだ」と本で指摘していたが、海外に出るとそのことが身をもって実感できる。かつて特派員としてベネズエラを訪れたとき、飲料水の値段がガソリンよりも高かったことも思い出される。

21：00　テレビのニュースを見る。ここでは 7 局が映り、夕方の 9 時台はほとんどの局がニュースに集中している。時節柄、どの局もサッカー(こちらでは「フットボール」という)には、熱を入れて放送しているのがわかる。つい少し前、ヨーロッパ杯でスペインが優勝したときには、真夜中の 12 時近いというのに、どの道路も旗を掲げた車がクラクションを鳴らして行き交い、人々の歓声で、町は 1 時間以上も喧騒に覆われたものだった。

時差に体調を合わせつつ

21：30 ようやく暗くなり始める。朝の明けるのが遅い代わりに、夜の暮れるのも遅い。まず、このリズムに体調を合わせるのがひと仕事である。もう 30 年以上も前だが、ＮＨＫ学園高校の教師時代、ソ連のレニングラード(現ロシアのサンクトペテルブルグ)を 8 月に訪問した際、夜の 12 時近くになっても完全には暗くならない、いわゆる「白夜」を経験した。コスタ・デル・ソルは緯度的にはそこよりはるかに南で、日本とそれほど違わないのに、なぜこうしたことになるのか。地元の人に聞いて、とりあえず要因がわかった。

スペインを含むヨーロッパ各国が採用している標準時は、イギリスのグリニッチ標準時に対して 1 時間進んでいる。サマータイム(夏時間)になると、グリニッチ標準時に対して時計の針は 2 時間進められるから、日本から着いたばかりの自分には“日の出が遅く、日没は更に遅い”と感じてしまうわけだ。日本で、突然、時計の針を 2 時間進めてみたら、きっとそれに近い感じになるのではないか。

それに、スペインは隣国ポルトガルとヨーロッパ大陸の一番西に位置しているが、日常のビジネス業務は他のヨーロッパの国々と取引がある。それらの国の人と同じリズムでやっていくためには、無理をしてもそれらの国と時差なしにしておくことが必要だという。

22：00　このリポートのまとめや、授業の教材のチェック等々。

23：00　「風呂に入る」と言いたいところだが、風呂につながる瞬間ガス湯沸し器の容量が小さいので、浴槽をいっぱいにして、というわけにはいかない。湯の量を半分以下にして、体をうまく横たえ温まる。でも、もう夏で暑いのでシャワーだけでも気にならない。そういえば、かつてのパナマではずっとシャワーだけですごしてきたわけだから。

24：00　就寝。つい先日まで毛布をかぶって寝ていたが、だんだん暑くなってきたので、

今はシーツカバーのみにしている。幸いだったのは、日本からスリッパとユカタを持ってきたことである。ベッド生活とはいえ、家の中では靴を脱ぎ、寝るときはユカタの生活が、日本人にはなんといっても安らぎを与えてくれるからだ。

多様なクラス仲間に刺激される

6月4日(火)　快晴

授業の初日。きょうは電車のストライキもないので、大学には早めに着く。入り口の掲示板にはクラス分けのリストが表示されていた。６つのレベルのクラスに分けられ、自分はＣ２＜中級の上＞に名前があった。

指定の教室に入る。仲間は全部で 13 人。それぞれの自己紹介によると：

トーマス　ハーバードとケンブリッジに学ぶニューヨークからの大学院生。フランス、スペインの歴史を勉強、Phd.(博士号)に挑戦中という。

アンソニー　アメリカのマイアミ生まれ。武術、柔術に関心がある。父親はキューバ人。教室でも野球帽をかぶったまま。

アナ　スイスから。女性ながらずいぶん背が高く、１㍍ 80 くらいはありそう。

サラ　スイスから。幼稚園の教諭。彼女は小柄でキュート。ドイツ語、フランス語、英語が出来る。

ヘレン　イギリスのサザンプトンから。大学生。このマラガ大学内に恋人がいるという。

ファン　中国系アメリカ人。現在はアメリカの大学でアメリカ文学(詩)を教えているという。40 歳くらいか。あごひげも生やし、なかなか活発な発言をする。

カロリーナ　スウェーデンから。母親はチリ人。両耳へのピアスのほかに、鼻の先にも小さな金色の飾りをつけている。

カリメラ　ギリシャから。いかにもギリシャ美人か。彫りの深い顔にあふれるような豊かな胸。しかもタンクトップで教室に来たのには驚いた。

リラックスした授業風景

それに日本からのＹ君、Ｋ君、Ｃさん、Ｙさん。それぞれ日本の大学から在学留学の人、一度就職したが辞めて来た人等、異なった背景を持っている。

そして、タケシ。

教室ではすべてファーストネームで呼び合う。教師も同僚もみんな私のことを「タケシ」である。教師に対しても、同僚も自分も「ラウラ」(文法担当)「ラファエル」(会話担当)とファーストネームで呼ぶ。

100 人以上の生徒がいる学校全体で日本人は５人。そのうちの４人が同じクラスに分けられたのは、ほぼ同じレベルにあるとはいえ、偶然だった。出来るだけ日本人だけでかたまらないように気をつけることとする。＜教師もここでは、「休み時間でも一切、母国語を使うな！」と厳命している＞

最初の２時間は文法の授業。「ser」「estar」(英語の「be」にあたる)の状況に応じての使用方法と時制の活用について。ラウラは 30 代と思われる女性教師。目が大きく髪はカールしている。テキストのコピーを配りながら、生徒にやらせてどんどん誤りを指摘していく。

会話のラファエルは、50 歳前後の細身の壮年で機関銃のようにしゃべりまくる。生徒の出身国の文化や習慣を、挑発するかのように容赦なく批判し、生徒の発言を引き出そうとする。強引な面もあるがなかなか面白い。

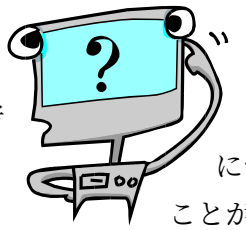
授業の後半、我が同胞学生は、近くのインターネットカフェで日本のサッカー試合(対ベルギー戦)を見る、ということで欠席。一番年輩で、大学も初めての自分が“ニッポン代表”として教室に残ることになった。

午後１時に授業が終わると、ファンとマラガセントロ駅の近くまで、歩きながら話を続けた。大学教授というだけあってなかなか博識。アメリカ文学が専攻だというが、いつか日中問題についても語り合いたいものだ。

老いてこそパソコンに挑戦！

夕方７時。ようやく日本から持参したパソコンのインターネットが開通した。こちらのプロバイダー業者と契約し、家に来てその設定をしてもらったのである。

さっそく、メールを何本か発信してみる。ＯＫである。インターネットで朝日新聞をのぞく。きょうのサッカーの試合結果(日本対ベルギー)が、写真と共にトップニュースで扱われていた。



逆説的のようだが、ネットは腰の重いシニアにとって、最も役に立つ道具だと思う。大多数の熟年者と同じく、私もメカに弱い一人である。現役時代の仕事柄、ワープロ機能についてはかなり熟達したつもりだが、それ以外となるとお手上げになることが多い。時々、動かなくなって前へ進まず、イライラしたり自信をなくしたりすることもあったが、何回でも友人に助けてもらっては、なんとかここまできている。

あのぶ厚い説明書を読んでもなかなかわからない。自分の経験からすれば、コツはパソコンに詳しい人に何回でも遠慮せずに聞くことだと思う。「なんだ、こんなことか」とすぐに解決することが多い。

可愛い孫たちとのメールでのやりとり。「パソコンこそお年寄りのおもちゃ」という声もあるが、器械の勉強や操作自体が脳を活性化する、とも言われている。世界と瞬時につなが

るこの最大の武器を使わない手はないだろう。

夜９時、テレビのニュースで再度見てみる。どの局もサッカーのリポートにかなりの時間を割いていたが、なにせスペイン本国が出場しているわけではないので、どの試合もそれほど丁寧には取り上げない。日本の試合模様も数分間で終わってしまった。やはり、日本にいなければ味わえないものもあるのはやむを得ないか！

研究発表に表れるお国柄

６月５日（水）快晴

授業の二日目。てきぱきと進める文法授業のクラスの雰囲気は昨日と同じだったが、教師のラウラのいでたちには少しばかり目を見張った。昨日は、黒のジャケットにパンタロンだったが、今日は渋みのかかった赤のワンピース。しかも、胸から下のみで、両肩、腕も丸出しなのである。以来、その後も毎日、衣装を変えてきた。このおしゃれは、教室の雰囲気も少し変わって楽しいものだ。

会話のクラスでは、生徒の出身国の国柄や考え方、行動の特色が随所に出てきた。昨日、教師のラファエルが、４人の生徒に課題を出した。

- ✧ どの新聞でもいい。昨日の記事の中から、面白いと思った記事を要約し発表、そこに出てくる言葉の用法について説明せよ。(担当：トーマス)
- ✧ 移民(合法移民、不法移民を併せて)を受け入れる国のメリット、デメリットについて、賛成派と反対派に分かれて討論をせよ。（担当：アンソニー、アナ）
- ✧ 最もおいしくて簡単に作れる中華料理の材料と作り方についてみんなに説明せよ。(担当：ファン)

トーマスが新聞から選んだのは、スペインのバスク地方の独立問題。なんとまあ難しい問題を取り上げたものだが、彼の専攻、リベラルな考え方からすれば、こうした問題に関心を抱くのは当然かもしれない。話はニューヨークの 9.11 の悲劇、その後のブッシュ政権の危険性にまで及んでいった。

アンソニーの話の態度にはまず少々驚いた。教壇で彼の説明が終わり、みんなからの質問時間に入ると、「いつもの通りでいい？」と教師のラファエルに確認した。「どうするのかな」と思ったら、教壇の椅子に座り、靴をはいたままの長い足を机に上げた姿勢で、みんなと対話を始めたのである。――これがアメリカの大学の一断面なのか！？

ラファエルからは“ニッポン代表”の自分に、「あの鎖国時代以来、一体、日本は移民の受け入れ嫌いの国ではないか」と挑発。私は、彼の理解の深さと説を一応認めながら、日本の現状について説明、自分なりの意見を述べた。

ファンの中華料理の講習は好評だった。ただ、このスペインでどうやってその食材を手に入れるかが問題である。ラファエルがイギリスからのヘレンをからかった。「あのイギリス

のまずい食事！　あんたたち、よくあのまずい食べ物でこんなに大きくなってきたね」。180センチほどもあるヘレンは少し赤面しながら、弁明するように何かを話していたが、よくわからなかった。

クラスでは、だれもが積極的に自分の意見を表明している。それに比べると自分を含め我が同胞は、少々発言ぶりが物足りない。スペイン語の理解度そのものから来る要因もあろうが、日本の小中等教育の教育環境からきている要因も大きいのではないか。

学生生活　第 2 報

迷信と諺

6 月 14 日、金曜日。6 時 30 分。朝起きると珍しく雷鳴がとどろいていた。しばらくぶりに黒く曇った空からはポツリポツリと雨が降り始めた。すぐに止みそうな気配だったが、念のために日本から持ってきた黄色い折り畳み用の傘を持参する。

電車で約 30 分離れたマラガも軽く雨が降っていた。傘なしの人もいる。10 分ほど歩いて校舎に着く。一番乗りで教室にはまだ誰もいない。始業までまだ 15 分ほどあったので私は自分の椅子の前に濡れた傘を広げておいた。5 分ほどして、幼稚園の先生をしているというスイス人のサラが教室に入ってきた。そして私の前の広がった傘を見るなり、彼女は挨拶もそこそこに叫び声をあげた。

“ Que mala suerte!”（「なんて運の悪くなることをするんでしょう！」）

「え！　何が？」

「あなた知らなかったの？部屋の中に傘を広げておくことは､不幸をもたらす良くないことと言われているのよ」

「ええ！それは知らなかったなあ。じゃあ、どこに広げたらいいんだい？」

「そりゃ、もちろん家の外よ」

やりとりをしている間に、文法の担当教師ラウラが教室に入ってきた。文法もだけれど、スペイン文化、スペインの風習を知ることも大事なことだ。そこで、他の同僚も揃ってきたところで、改めてラウラに聞いてみた。

「そう、サラの言うとおりよ。あなたのやったことを見たら大部分のスペイン人は驚き、一部の人は嫌がるワ。Supersticion(迷信)と言うんだけど、こういうの他にもいくつもあるのよネ」

そういいながら彼女はいくつかの例をあげた。

✧　黒い猫が自分の前を通ること

✧　はさみが広げられたまま置かれていること

✧　鏡を落として割ってしまったとき

・・・・・

日本にも多くの迷信がある。その非科学性、非合理性がすべて迷信とだとしてあっさり片

付けてしまっては、人間の精神の豊かさというものが無くなってしまうかもしれない。庶民の心理には世界に共通するものがあるようだ。

諺の豊かな国スペイン

ところで、スペインは諺の豊かな国である。スペイン語圏の人々は、その歴史的遺産でもある諺をこよなく愛しており、諺は教養の一つである、とさえ思われる。あらゆる機会に、あらゆる場所で使われる。小説「ドン・キホーテ」に登場するサンチョ・パンサのしゃべり言葉の中には、庶民の実感に根ざした諺、あるいはそれに類した創造語が頻繁に出てくる。

7 月 23 日、月曜日(テーマの都合でこの部分 7 月のリポートから繰り上げた)。会話のクラスの研究発表の日だった。担当となった、エストニアからのリストは、スペインの諺について語った。“ 実演 ” も交えたそれが大変に面白かったので、ここにその一部を再現してみたい。

黒板前の教師用の机に座ると、彼は後ろに置いた鞄の中からおもむろに小さな辞典のような本を取り出した。「諺の辞典です」。続いて再び後ろにかがむようにすると、中くらいの大きさの本を取り出した。「諺の辞典です。1 万 1 千の諺が載っています」。(「小」から「大」へ。そのしぐさに教室内は大笑い)　彼がもう一度かがむと、今度は日本の百科事典を倍の厚さにしたような本を取り出した。「これも諺の辞典です。6 万の諺が載っています」。教室内は爆笑と拍手。それほどに、諺関係の本もある、ということだろうか。

かくして彼は、50 余りの諺を状況に合わせて順序だてて読み上げ、説明を加えていった。(諺には、語頭または語尾が韻を踏む面白さのものがあるが、残念ながら日本語訳ではその面白さは再現できない。代表例の拙訳は、なるべく日本の諺のようにやってみた)

「安物は高価につく」(安物買いの銭失い)
「腐ったりんごは隣りまで腐らせる」
「最後の旅にはトランクは要らない」
「うんと食べるものはうんと糞ひる」
・・・・・・・・・・

今度は、また後ろの鞄から何かを取り出した。なんと、それは 1 本のワインとグラス。ボトルを開け、グラスに注ぎ、一口飲むとおもむろに次の諺を読み上げた。(みんなは野次馬根性でその展開を見ている。担当教師のローラも、笑いながら黙認している)

「やぶ蚊が蛙に言った。『水の中で生きているよりも、ワインの中で死んだほ

うがいい』」

「水は魚に、ワインは人間に」

「ワインなしの人生に喜びなし」

「ワインについて語る者は喉が渇く」

(こう言いながら、またグラスを一杯)

「ワインは、飲めば飲むほど、喉はますます渇く」

(こう言いながら、更にもう一杯。スペインはワインの国である。栽培面積は世界一、生産量ではフランス、イタリアに次いで世界第 3 位である。それほどに、ワインについての諺も多いのだ)

この辺から、また真面目な諺に戻ってきた。これにはスペイン語の原文もつけ、拙訳と同類の日本の諺とも対比してみよう。

No vendas la piel del oso antes de cazarlo.

「熊を獲りおさえる前に熊の皮を売りに出すな　←　獲らぬ狸の皮算用」

En boca cerrada, no entran moscas.

「閉じた口には蚊は飛び込まない　←　口は禍のもと」

Nunca llueve a gusto de todos.

「雨は決してみんなに都合の良いようには降ってくれない　←　あちらを立てればこちらが立たず」

かくして、研究発表の締めくくりとして彼は言った。「昔からの諺は決してうそをつかない」「諺の中に真実あり」――。

物事をどうとらえていくか、諺は社会の中での人間の生き方、心の機微をついている。この項の締めくくりとして、私も二つの諺を紹介したい。

Nunca es tarde para aprender.

「学ぶのに決して遅いということはない」

Se puede aprender a cualquier edad.

「人生、何歳からでも勉強できる」

――「六十の手習い」である。少し真面目すぎるかな？

学生生活　第３報

一つレベルが上がったが・・・

7 月に入ると、最初の月曜日に再びレベル（クラス）分けの試験が行われた。試験要領は 6 月の時と同じだったが、質問の内容が文法的にやや難しくなっていた。「間接法」の使い方を問うものがかなり出題されたが、幸いにも 6 月の勉強の成果が反映されて、良い出来だったと思う。

火曜日。クラス分けの発表。レベルが一つ上がった。「Ｄ１」――上級の「下」である。

先の「Ｃ２」から上がってきた仲間が 5 人。もともと「Ｄ１」だった人、すでにかなりのスペイン語力はあるが、お国の大学が夏休みで、この機会にマラガ大学の夏季コースを修めに来た人等々、計 16 人。国籍的にはまた多様性を増した。6 月には無かった出身国を挙げていくと：

ユーゴスラビア、エストニア、イスラエル、アルジェリア、メキシコの５カ国。エストニアからの 40 代の壮年リストはフィンランド生まれ。完全なスキンヘッド(坊主頭で)往年のユル・ブリンナーに似ている。現在、離婚中という。アルジェリアの首都アルジェからのサミエルは、30 代の技師。アラブ系白人のすらりとした長身にちょび髭、ソフトな振る舞いを見ていると、とてもアフリカからとは想像がつかない。(こういう先入観が、無意識のうちに人種差別を醸成していることを、自分も気をつけなければならないだろう！)

他は、みんな現役の大学生のようだ。メキシコからの女子は、現在、アメリカに住んでいる。家庭で親との会話で身につけたスペイン語で、日常会話には問題ないが、正しいスペイン語をキチンと話せるために文法の修得が必要なのだという。

左から筆者、イスラエル、イギリス、アメリカ、日本のクラスメート

カリキュラムには大きな変化があった。これまで、文法 2 時間、会話 2 時間だったが、今度は、文法 1 時間(担当教師：ローラ)、会話 1 時間(同)の他に、スペイン文化コースとして、スペイン史 1 時間(同：アナ)、観光概論 1 時間(同：カルメロ)が加わった。名前で推測がつくように、ローラもアナも女性。どうも授業については女性の教師陣の方が優勢のようだ。

文法は間接法の復習から。会話はその都度テーマが変わるが、面白い試みは出身国別に、その国民性の長所、短所を指摘しあうものだ。その国の出身者を傷つけかねない、きわどい発言もあるが、喧喧諤諤(けんけんがくがく)、それぞれが、にわか仕立ての愛国者になって、自分の国を“防戦”しようと必死になって言葉をさがすのは、会話の上達には適しているのかもしれない。

スペイン史は、市民戦争からフランコの独裁までの現代史が中心。観光概論は、観光立国スペインのよって立つ背景について理論的に検証するもの。その国を訪問する外国人観光客の数からすると、スペインは、フランス、アメリカに次いで世界第３位の位置を占めている。2001 年の統計で、国外からの年間訪問者 4,800 万人は、国の人口(約 4,000 万人)を超えている。

ビクティマ(犠牲者)を名乗り出る

７月５日、金曜日。会話時間の研究発表の担当は私だった。授業の初日の火曜日に、ロー

ラが皆に問いかけた。
「これから毎週金曜日は、あなたたちの中の代表が何かについて発表し、それについてディスカッションをする、という形で進めることにします。ついては最初の登壇者、ビクティマは誰になるかな？」
「ビクティマ」とはスペイン語で「犠牲者」の意。テーマを用意し、発表し、みんなの質問や意見に対応する労苦をおもんばかってそう言ったのだろう。
　教室内は急にシーンとなってしまった。ローラと目をあわさないように、皆なんとなく下を向いている。
　「ハイ、勇気あるビクティマは？」。再びローラが問いかけてもシーン。無理もないかもしれない。スペイン語についてまだ自信もないところに加え、３日間という短期間に、テーマを選び準備するだけでも大変だからだ。
　いつまで待っていてもらちがあきそうにもない。そこで、自分が思い切って名乗り出た。「ＯＫ、じゃ私がビクティマになって、トップバッターを引き受けましょう」。これまでに１ヶ月の教室経験があることと、かつて中南米にいたときの体験をかみ合わせれば、なんとかなるだろうとの楽観と、クラスで最高齢であることが、なんとなく義務感みたいなものを感じさせたからでもある。
「年齢的には自分の息子や娘みたいな生徒仲間を、ローラの攻めから守ってあげなくてはいけない」と、妙な“人生の先輩”意識が出ていたとも言える。
　みんなはホッとしたようだった。続いて、「じゃあ、その次は自分が」とアルジェリアからのサミエルが名乗りをあげた。こちらの勢いに引っ張られたのかもしれない。

　さて、テーマを何にするか――。私は、以前にローラが「日本からの学生は、なぜか教室でもあまり発言しようとしない」と言うのを聞いていた。おしなべてどの教師もそのように言う。そこで、なぜそうなのか、その背景に触れ、少しは反論も出来るようなテーマに決めた。「スペインと日本の文化・習慣の違いについて」。
　内容は、スペインに来てからこれまでに体験、見てきたことを中心に感想を述べ、日本との対比、背景について語るものである。大きく３本の柱を立てた。

１．時間に対する感覚の違い
２．しぐさの違い
３．言葉の構成の違いと、そこから来る「謙譲」の文化について

　以下は、発表原稿の概要である。これを出来るだけ見ないで、ジェスチャー豊かに話さなければいけない。「３」では、黒板に日本語の文字とそれに該当するスペイン語を書きながら説明した。
(もちろん、話したスペイン語原稿は、誰にチェックを依頼する時間もなく、文法的にもま

だ多くの誤りがあったと思う。そして、皆にこちらの意図するものが完全に伝わったかどうかも定かではない。これは後ほど、この本のために、わざわざスペイン語から訳した日本語原稿である。その際、教室では触れなかったことで、大事なことは＜＞で書き加えた)

――私の研究発表――

「スペインと日本の文化・習慣の違いについて」

１．時間に対する感覚の違い

スペインに着いてから 2 ヶ月が経過しました。この間に、時間についての感覚の違いを何回も経験してきました。そこで、その代表的な一つを紹介したいと思います。もしかしたら、これらは皆さんの国の状況と似ている面もあるかもわかりません。私の話の後に、是非、感想や意見を聞かせてください。バレ？(「いいですか？」の意)

先月の初め、アパートにようやく電話を設置することが出来ました。でもその設置が出来るまでにはずいぶん難儀をしたものでした。電話局の担当者に、携帯電話から何回も催促の電話をしなければならず、相当な忍耐を必要としたからです。

設置を申し込み＜わざわざ電話局に行かなくても、電話により申し込み出来る。住所、氏名、パスポートＮＯ．取引銀行名・支店名、口座番号を知らせるだけでよい＞、取り付け工事日の約束をしました。そのとき工事の担当者は2日後の午後6時にアパートに来ると返答したのです。

指定の日、私はずっと家で彼の来るのを待っていました。ところが、6 時を過ぎても、7 時を過ぎてもやってきません。念のため、終業時間の 8 時まで待ってみましたが現れません。しかも、何の連絡もないのです。彼は私の携帯電話の番号を持っている筈でした。

翌日、再度、事務所に電話をしました。電話口に出た担当者は「バレ、バレ(了解)、明日６時ごろには行くからね」と。さてその翌日です。皆さん、どんな結果になったと思います？

なんと、また現れなかったのです。

その次の日の朝、私は少々の怒りと脅し言葉を使って、再び催促の電話を入れました。その結果か、ようやく正午近くに担当者がやってきて、設置は何とか順調に済んだのです。でも、約束どおり来られなかった事に対する、納得のいくような説明はありませんでした。

私はここで、大好きな、またお世話になっているスペインの国の悪口を言おうとしているのでは決してありません。遭遇した事実をそのままお話しただけです。多分、たまたま当った担当者が、特殊な状況下にあったか、あるいは、これは極端で例外的なケースだったのかもしれません。

(私の座っていた生徒席に座ったローラが＜私自身は教師席にいる＞、「気にしない。気にしない。よく言ってくれた。本当にその通りなのだから」と、こちらの説に同調するかのよ

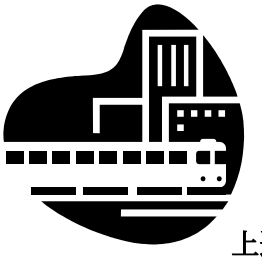
うに、笑いながら相槌を打っている)

実は、私は仕事でかつて中南米にいた時に、同じような体験を何回もしています。そこで、スペイン語圏で最も使われる挨拶言葉「アスタ・マニャーナ」について、自分なりの新たな解釈を作り上げたのです。

「アスタ・マニャーナ」とは、皆さんも知っているように、スペイン語で本来、「明日まで」または「明日また」といった意味です。私はパナマにいる時、それをもじって「五つの『あの原則』」を編み出しました。『あせらず』『あわてず』『あくせくせず』『あてにせず』けれども、決して『あきらめず』――。この「五つの『あの原則』」を、心にとどめている限り、仮に思うようにことが運ばなくてもイライラしないで済む、ということです。

これはそれぞれの語頭が日本語の『あ』の母音を踏んだもので、日本語としては面白いのですが、スペイン語(no apresurarse, no precipitarse, no desesperarse, no esperar, mas no desistir)ではその面白さが伝わりにくいですが、推測してみてください。

日本では、約束時間を守るということは、仕事、また社会の人間関係において、信用を勝ち得るための最も基本的な要素です。それは日本の交通機関にも反映しています。



例えば、東京では 10 両以上の編成の電車が 2，3 分おきに時間通りに発着しています。時速 250 キロ以上で走る新幹線も、1 分と違わず発着します。電車やバスが 30 分以上も遅れようものなら、乗客が文句を言い始めるのです。ですから、もし特急が目的地に到着するのに 2 時間以上遅れれば、その運輸会社は乗客に特急運賃を返還するのです。

「時は金なり」との諺がありますが、これは、日本社会の一部を表わしていると思います。それだからこそ、日本の経済と技術が発展してきたとも言えるかもしれません。だからと言って、このように、時間に正確で、時間に支配されているような日本人の生き方が100%良いということでは決してありません。

この生き方を文字通りに大げさに解釈すれば、日本では「時間が主人で人間がその従者」とも言うことが出来るでしょう。最初の電話設置のケースは例外としても、時々、スペインやラテンアメリカの、時間にややルーズな生き方のほうが、ユーモアがあって、穏やかではないかと、思うことがあります。つまり、ここでは「人間が主人で時間は従者」になっているんですね。

皆さんはどう思いますか？

(ウンウンとうなづいて、何か発言したいような仲間もいたが、時間の都合もあったので、最後まで話し終わったところで、まとめて聞くことにした)

２．しぐさの違いについて

一般に、スペイン人のしぐさ（ジェスチャー）は、非常に開けっぴろげで、楽しく、ダ

イナミックのように思えます。街の道路またはパーティなどで行き会うと、スペイン人もラテン・アメリカの人々も、抱き合い、両頬にキスし、自分の気持ちや感情をストレートに表現しています。

これは話をするときも同じです。みんな、顔を動かし、手を動かし、体を動かし、さまざまなジェスチャーを伴っていますよね。スペインに何年か住んでいた、ある日本人の女性作家が、この抱擁とキスについて次のように書いていました。

「スペインでは、遅れてパーティに駆けつけようものなら、そこにいるすべてのアミーゴ(友人)とキスをしまくらなければ、ワインにもありつけない」

表現はやや大げさかもしれませんが、こちらに来て見ると、彼女の言わんとすることが良くわかるような気がします。

これとは反対に、日本人のしぐさ、ジェスチャーは大変に小さく奥ゆかしいのです。道路や会合で知り合いに行き会うと、我々の挨拶というのは、挨拶言葉と一緒に頭をさげるだけです。――「こんな感じで・・・」(お辞儀のしぐさをする)

もちろん、場合によっては我々も握手をすることがあります。でもこれは、「人」によりけり。一般に、年輩の人はこうした習慣を持ち合わせていません。こういう人にとっては、人前で抱擁したりキスをしたりするのは、はしたない、恥ずべきこと、慎むべきこと、といった感覚さえあるのです。これは、昔からの日本の伝統、しきたりから来るものです。

でも、私には、体温のぬくもりが伝わる抱擁やキスの挨拶のほうが、二人の間に冷たい空間を置いた日本人の挨拶より、もっと愛情と親密感が伝わるような気がするんです。

今、スペインにいて、私は、なんてラッキーなヤツだろうなんて思っています。この年をして、若い女の子とも、はばかりもなくキスの交換が出来るのですから。(ドッとした笑いに掛け声と拍手)

3．言葉の構成の違いと「謙譲」の文化について

(笑いが収まったところで)　さて、皆さんも体験しているように、スペイン語はなかなか難しい。特に動詞の変化が難しいですよね。でも、発音となると、日本人には他の外国語、例えば英語などよりもやさしいです。もちろん、「L」と［R］または「F」と［J］の発音の区別などは大変に難しい。でも、良いことは、「アエイオウ」の母音が非常に似ているということです。

その一方で、日本語はマスターするのには大変に難しい言語だと思います。相当な努力をすれば、外国人でも日本語を話すことが出来るようにはなるでしょう。でも、読んだり、書いたりする段になると、それはそれは難しくなるのです。

日本の文字には 3 種類あります。ひらがな、カタカナ、漢字です(ここで黒板に、文字例を書き出して説明)。ひらがな、カタカナともに 50 字ですが、漢字となると、普通に社会

生活を出来るために知っておく文字は 2000 字近くになります。これらの文字を記憶するのには、大変な努力と時間を必要とします。

ここから、きょうのテーマに関係してきます。つまり、何か言ったり、書いたりするときには、話し相手や状況に最も合う言葉を探さなければならないということなのです。というのも、日本の社会では、へりくだった謙譲の表現が要求されるからです。

謙譲の意を表す言葉、尊敬の意を表す言葉があります。そこで、状況に最もあった言葉を選ばなければいけないのです。ここに日本人のまた日本社会のメンタリティーの一部が現れています。

例えば：自分自身を表現するのに、10 近くの言い方があります(黒板に日本語とローマ字読みを書く)

私(わたくし)、私（わたし）、僕、俺、我、ウチ、手前、小生、等々。「わたくし」はより丁寧で上質の表現です。「わたし」は比較的丁寧な表現で、最も一般的に使われています。「僕」「俺」「我」ともに男性が使用。このうち、「僕」はより口語的で、「俺」はやや丁寧さを欠き、「我」はやや古い表現です。「ウチ」は両性によって使われます。「手前」もへりくだった古い表現。「小生」は主に手紙や書き物の中で、やはり、へりくだった表現として使われます。

繰り返しますが、日本の社会で大事なのは「謙譲」の心なのです。これを良くわきまえないと、周りから「あいつは傲慢だ、頭が高い」と言われかねないのです。これは、先ほど述べた、ジェスチャーにもつながるものです。

スペイン語では、自分を表現する言葉は［Yo］の一つだけすよね。英語でも同じ、「Ｉ」だけですね？　もちろん、動詞の使い方によって、丁寧の度合いを変えていくのもお互いに勉強しました。でも、日本語の丁寧語、謙譲語ほどの複雑さではないと思います。

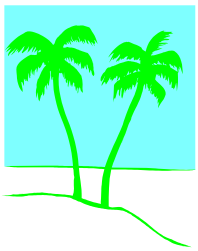
昨日、それぞれの国民性の長所、短所についてディスカッションしたとき、ローラが「日本人はなかなか発言しようとしない。自分の意見を表明しようとしない」と言いました。それは、基本的には日本の教育システム――教師の一方的講義を聞くだけで、そこで自分の意見を述べ、討論をし合うということが少ない――から来るものですが、また、自分たちのスペイン語が意見を自由に表明できるまでに至っていないから、という面もありますが、もう一方で、日本人が、もともと自分を敢えて表に出そうとしない「謙譲」の心があるからです。これで、その背景が、少しわかってくれるといいんですが・・・。
(難しかったのか、こちらの説明が悪かったのか、私のスペイン語がわからないのか、あまり反応はない。そこで最後に盛り上げを試みる)

“一人の女性”をめぐるジョーク

ここで、国民性を語るのに面白いジョークを紹介しましょう。

――ある日、大洋を航海していた船が衝突し、沈没してしまいました。海に放り出された乗客は、遠くに見える島に向かって泳ぎだしました。その中、たった 3 人だけ、この小さな島に泳ぎ着くことが出来たのです。3 人の内訳は、男 2 人と女 1 人でした。

さて、皆さんに質問したいのですが、この男 2 人は、女 1 人をめぐってどんな行動をとったのでしょうか？



（みんなはガヤガヤ言い始めたが、話の予定時間を過ぎようとしていることと、話の腰を折られないように、自分が続いて話していった）

答は次の通りです。

フランス人：　1 人は彼女の正夫に、もう 1 人は彼女の愛人になりました。

イギリス人：　なんと 2 人は、その女を放っておいて、自分たち 2 人で愛し合いを始めたのです。

イタリア人：　2 人はこの女を自分が手に入れようと決闘を始めたのです。

では、日本人はどうしたでしょうか？

2 人は、島のどこかに電話がないかとあわてて探しに出かけました。本社に電話して、上司の指示を仰ごうとしたのです。(爆笑が広がり、続いて拍手が)

このジョーク、日本人の行動形態の特徴の一部を良くあらわしています。

＜時間の都合で教室では話さなかったが、他にも、よく知られたタイタニックのジョークがある――いよいよ沈没しかけた船から男も女も我先にと救命ボートへ避難しようとした。大混乱になろうとしている現場で、婦女子を優先させようとして船長が説得を試みる。
まずアメリカ人男性に：「キミはヒーローになりたくないか！」、イギリス人男性に:「あなたは真性のジェントルマンだ！」、ドイツ人男性に:「君の国の法律ではそうなっているよ」、そして日本人男性には「皆がそうするからあなたもそうした方がいい」＞

このように日本人は、他人のするように自分もするという、傾向を持っているのです。

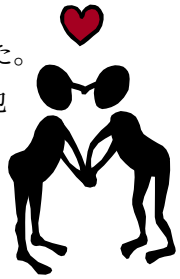
私はドン・キホーテの言葉が大好きです。その一つにこういのがあります。日本のミュージカル「ラ・マンチャの男」で、ドン・キホーテが語っています。私はこの言葉を名刺の裏に印刷しています。

「理想と正義に向かって突進するオレのことを、みんなは気違いだと言う。でも、やりたいことがあるのに、世間の風評、体面なんかを気にして現実に妥協、やろうとしない彼らこそ気違いじゃないのかね」

この言葉の後半部分は、日本人のメンタリティーをも表しています。
まだまだ、比較したい項目はいっぱいあります。例えば、「闘牛についてどう考えるか(残酷ではないか)」とか「サッカーへの興奮度」とか・・・。この一つ一つのテーマを論ずるだけでも 1 時間は必要でしょう。持ち時間も考えなければいけないので、私の話はこれで終わります。どうもありがとうございました。
（ローラも教室の皆も大きな拍手を送ってくれた。やったという充実感と、ホッとした安堵感が交錯する）

「エッ　日本じゃキスしない！？」

ここで質問、討議に入った。まず、担当教師のローラが、電話の設置のケースについて、「他にもいっぱいあるのよねぇ」と同調。教室の同僚の何人かも「そうそう、確かにそうだよ」と。



しぐさについては面白い発言が飛び出した。突然くしゃみが出そうになった。その時、どうするか。スペインでは両手を口元に持っていく。もちろん、他人に飛ばないようにとの心遣いである。スウェーデンからの学生は「我々は、すぐ腕の肩に近い部分を口元に持っていくよ。だって、手は他人と握手をする。相手に対しても汚いではないか」と。
（「ハックション」という活字での表現も「ハッチ」とか、いろいろありそうだが、そこまで話は展開しなかった。ただ、くしゃみが出ると、たいがい、周りの誰かが「ヘスス」とか「サルー」といった声をかける。「お大事に」という意味だが、仏教徒の自分には「ヘスス(イエス・キリストの意)」より「サルー(健康の意)」をかけてもらった方が気持ちがいい)。
抱擁とキスについては、そのやり方について、喧喧諤諤(けんけんがくがく)の意見が続出。「そういえば、男同士キスする国も結構あるじゃないか。よくテレビで政治家同士がやっているのを見るし・・・」
とどめの質問(というよりも、驚きの感嘆符)は「えぇ！　じゃあ、日本では親子の間でもキスをしないの？！」だった。
緊張しながらも、なかなか楽しい小 1 時間だった。

学生生活　第４報

8 月は所用があって妻と一時帰国した。幸い、日系の航空会社では「里帰り便」とか「呼び寄せ便」といって、格安便に似た安い切符を出している。夏の繁忙期だったのでやや高くついたが、それでも全日空で、マラガ――成田往復 1 人 948 ユーロだった。（この時期を外すと 700 ユーロほどでも往復できる）
8 月末に日本から戻ると、さっそく 9 月 2 日から夏季コースの最終月が始まった。例によ

って、初日はクラス分けの試験。再びD(上級)クラスとなった。仲間は16人。6，7月のクラスに比べて、国籍的に新しい生徒はいない。ただ、現在はアメリカに住んでいるが、生まれはメキシコという女子大学生が 4 人もいるのには驚いた。彼女らはクラスでも流暢にスペイン語を話す。ただ、文法が正確でないのでここで勉強しているということだった。

担当教師はベレン。文法と会話のクラスの進め方に大きな変化は無い。接続法の基本的な復習とそれを更に深化させたものである。ここでも一人一人に短時間の研究発表が課せられた。新たに加わった課題としては、自分がふだん訴えたいと思っていることについての作文と、どこかに抗議の手紙例文の作成があったことだ。

研究発表は“ゴミ処理問題”

研究発表は、今回「環境問題」をテーマにした。たまたま、南アフリカで環境に関するサミットが開催された直後だったことからだが、内容はグッと身近なスペインのゴミ処理問題とペットの扱いについて絞った。

トレモリーノスのアパートで生活を始めてまず驚いたこと、それは、家庭で出るごみを区分せずに、いつでも近くにあるコンテナに捨てることが出来ることだった。出身の東京・昭島市の団地(1350 世帯)では、昨年からゴミは可燃、不燃、有害、資源、プラスティック、危険物、古紙と 7 種に分類するように義務付けられ、それぞれのゴミを出せる日も指定されていた。自分も、団地の管理組合の理事を 3 年ほど務めたが、ゴミ処理問題は団地の最大の悩みの一つだった。

それが「いつでも、何でも自由に」という。本当にそれでよいのか気になって、リサイクルに力を入れている日本の現況を説明しながら大家さんに確認してみた。

「確かに日本のようなやり方は理想でしょう。でも、リサイクルにはお金がかかる。そんなお金はスペインにはないでしょう。それよりも、今は捨てたほうが安上がりなのです。ここは人口に比べてはるかに広い土地がありますから・・・」

なるほど、事実はその通りかもしれない。でも、やがてはスペインも日本のように対応していかねばならないときが来るだろう。そして、地球上のすべての国が、未来のためにゴミ問題を真剣に考えていかねばならない時に来ていると、クラスで私なりに熱弁をふるったのだった。

すると、ドイツの男子学生ルーツから反応があった。「わが国でもほぼ日本と同じように対応しているよ。いや、ドイツのほうが進んでいるかもしれないな」。日本からのゴミ問題の視察団が訪独したこともあることからすると、彼の言葉の通りかもしれない。

なぜ犬の糞を片付けないの？

もう一点は、犬の糞の始末に関する感想であり、意見である。アパートの周りには犬を飼

っている人が多い。そして、朝早くや夕方になると、その犬を連れて散歩をしている。動物愛護、大いに結構。でも、道路のあちこちに犬の糞が残されたままなのである。小さなシャベルやポリ袋を持ち歩いている人はほとんどいない。汚いし、臭いし、ついうっかり踏みつけかねない。

「家の外での自分の犬の糞は、当然、飼い主が片付けるべきだ。それは飼い主としての最低限のモラルではないか！」と、私はやや感情をこめ訴え、みんなの同調を誘った。クラスの半分くらいが同意見だった。「私もウッカリ乗っかって、あやうく転んでしまうところだったワ」という女子もいた。

法律か条令みたいなようなものはないのかと、教師のベレンに確認してみた。彼女曰く。「そう、あることはあるんだけど、みんな守らないのよネ。警察も取り締まる立場にあるんだけど、注意しているのを見たことがない。やはり、教育と飼い主のモラルを高める以外にないのかもね」

時間の都合もあり、討論はこれ以上には進展しなかった。

このように、毎日交代で、全員が 30 分ほどの時間を使ってテーマの発表と皆での討議をする。なかには、日本では考えられないようなテーマを取り上げる仲間もいた。「最近の若者の性動向について」「中絶についてどう考えるか」・・・ドイツとアメリカに住む女子大学生からである。

自分がふだん訴えたいと思っている私の作文のテーマは「定年留学」について。抗議の手紙の文例は、先にセビリアを訪れた際に感じた、セビリア駅のトイレの不便さ、不合理性について同駅駅長宛のものだった。スペインを愛し、セビリアの発展を願い、駅長の立場を考慮した“ 建設的批判 ”の手紙は、先生から思いがけずにも「excelente!(優秀)」との評価をいただいた。

気を良くした私は、実際に役立つことが出来るならと、それに若干の手を加えて投函した。すると、なんとその 1 ヵ月後、セビリア駅駅長から、投書への御礼と駅の現況説明、毎年行っている乗客へのアンケート調査の結果報告、そして改善を約す丁重な手紙を受け取ったのだった。思ったらすぐアクションが大切なのだ。

期末試験「やったネ！　タケシ」

ところで、上級になると、4 時間授業の後半の 2 時間は、1 時間ごとに分けて文化コースとなる。月の前半は「現代映画」と「近代美術」、後半は「スペイン自治」と「20 世紀のスペイン経済」だった。各科目とも夏季コースのため、合計で 10 時間の短い講義だが、スペイン文化について理解を深めるには恰好の授業である。

スペインは映画作りの盛んなヨーロッパでも有数の映画大国だ。製作本数、質の高さもかなりなもので、カンヌやベルリン、モスクワなどの国際映画祭でたびたび賞を取っている。

「現代映画」では、先生の解説付きで評判の映画 2 本を鑑賞した。期末の試験はその映画についての自分なりの解釈の小論文だけでよかった。「こんなことでよいのかな？」と思うほど、気楽で楽しい授業ではあった。

「近代美術」では、ゴヤとピカソの人物と作品について勉強した。期末試験は 3 問から 1 問選択の小論文だった。私はピカソの「ゲルニカ」を選んだ。作品の生まれた背景と、作品そのものについて自分なりに解説したあと、最後を次の言葉で締めくくった。

「『1 枚の写真は 1000 文字のメッセージに該当する』との言葉があるが、戦争の残酷さを余すところなく描き出した『ゲルニカ』は 10000 文字のメッセージを内包している」

なんと、この言葉が良かったのかどうかわからないが(内心、我ながら良い言葉が浮かんだものだと思ってはいたが)、掲示板に発表された成績は 100 点だった。

夏季コースの最終日。担任教師（前列中央）を囲み記念のポーズ

「　やったネ！　タケシ」。

クラス仲間の何人かから声がかかった。

文化コースの科目に限っては、その都度、受験者全員の名前と成績が廊下の掲示板に貼り出される。正直、書くことは書いたが、答案には文法的な誤りも結構あったと思う。ただ、自分の長い人生経験から、答案内容には若者にはない深みがあったのかもしれない。あるいは、もしかしたら、東洋からやって来た年配壮年の勉強意欲に、先生の特別な配慮みたいなものがあったのかもしれない。

それはともあれ、自分の子供のような年齢の外国人の生徒仲間(女子大生も多い)から褒められると、少しばかりの恥ずかしさと共に、意外にも嬉しさも込み上げてきた。はるか 40 数年前の、中学校や高校時代の試験発表時のスリル、淡い興奮みたいなものを久しぶりに味わったものだった。

もちろん、なかには 60 点台の試験結果もあった。50 点が各科目の合格点だからスレスレの“低空飛行”である。でもそんな時、やや気を落としながらも、「そりゃ、まだスペイン語自体がよくわからないんだから当たり前さ」と、自分で自分を納得させたりしたものだった。担任教師も心得たもので、授業の欠席が極端に多かったり、よほどの悪成績でない限り、及第点は与えてくれる。

クラスの若い仲間からの刺激といい、試験勉強 (“何が何でも”といった追い詰められたものや悲壮感がないから、気楽に出来る) といい、結果発表の時の淡いスリルといい、これぞ留学生活がもたらしてくれる精神の若返りと充実感というしかない。

ＥＵがもたらす未来の可能性

「スペイン自治」は、この国の現状を知るうえで実質的にも役に立った。17 州 51 県の政治機構と、各地域の社会的・産業的特徴。同胞を殺しあった市民戦争(1936〜39)からフランコの長期独裁(1939〜75)を経て、1978 年、新憲法のもとようやくヨーロッパの仲間入りをした歴史的経過、等々。

昨年の統計によると、スペインの人口は約 4,085 万。現在の出生率は 1.22 と極めて低い(ＥＵ＜欧州連合＞は 1.53)。理由はいくつもの要因から来ているようだが、最も大きなものは、女性の 50%が仕事を持つようになったことだという(ＥＵは 58%)。いかに人口増を図っていくかが中央政府、各州政府の課題だというが、この点に関しては、日本の現状にも酷似していてなかなか興味深かった。

そして「20 世紀のスペイン経済」。硬いイメージの教科にしては、担当はなかなか美人の若い先生だった。ずっとスライドを使いながらの授業だったが、日本の経済機構にも通ずるものがあって、なんとか理解できた。自分としては、ＥＵ加盟と、今年から始まったユーロ経済がどのような進展をしていくかに関心があったが、残念ながらそこまでの時間はなかった。ユーロはまちがいなく「21 世紀経済」の課題であろう。

ただ、ヨーロッパ各国から来ている学生仲間の話から、驚き、感銘したことがある。

ギリシャからの女子学生エバが言った。

「このサマーコースが終わったら、ここスペインで仕事を探すワ。またいつか大学に戻り、今度は法学部に進むかもしれないけど」

「エッ！そんなこと出来るんかい？学生ビザじゃあ無理じゃないの？ちゃんと労働許可のビザを取得しないと」

「そんなこと必要ないワ。職種にもよるけど、パスポートさえ提示すればいいのよ。もちろん、仕事の能力を示す資格の証明書とか履歴書は必要だけど・・・」

「へえ、そうかい？我々日本人がスペインで働くとなったら、いろんな書類をそろえて大使館に申請しなければいけないんだぜ。しかも条件は厳しく、そんなに簡単にはビザは出ない。外国人が日本で働く場合も、難しい制限がいっぱいあるけどね」

「そう、ＥＵに加盟している国は、大きく可能性が広がったのヨ」

――そういえば、他の国から来ている学生からも、スペインに残って働きたい、といった話を聞いたことがある。ＥＵ加盟国の間では、ビザも廃止され、ヒト(労働力)、モノ、カネ、サービスの移動が自由化された。これはユーロ圏という単一市場の形成への第一歩。欧州の経済統合から、やがては更に政治統合(ヨーロッパ合衆国？)まで進むのかなど、文明史的な壮大な実験ともいわれている。各国からの学生に接していると、その流れの一端をかいま見る思いがする

学生生活　第 5 報

クラス仲間を我が家に招待

9 月末、夏季コースの最終日。授業の終了後、大学近くのカフェテリアで茶話会を持った。このコースを最後に母国に帰る受講生が何人かいたからである。ビールにつまみ、コーヒーといった簡素なものだが、担当教師も参加して送別会的な意味も含めていた。

席上、隣り合わせで座っていたリスベスと、ひょんなはずみで各国の食事メニューについて論議する羽目となった。彼女の両親はメキシコ出身で、本人は今アメリカのニューメキシコ州の大学に学ぶ。大学のすぐ前に日本食レストランがあり、一度だけ入ったことがあるという。

「とてもおいしかったワ。でも、高くて私たちのような学生の身にして、そんなに時々行くわけにはいかないのよネ。日本食はおいしくてヘルシーだし、またスペインでも機会があったら食べたいなぁ。特にスシなんか最高！」

「確かにそうかもしれないねえ」

なんて日本食論議をしているうちに、話はいつしか彼女にスペインでも日本食を味わわせてあげる方向にと展開していっていた。

「じゃ、一度、我が家に来なさいよ。スシは材料が揃わないから出来るかどうかわからないけど。せっかくだから、クラスの仲間と一緒に来たらどうかね」

・・・・というわけで、皆を我が家(アパート)に招待することになった。私にとっては、彼(女)らは、年齢的に自分の息子や娘のようなものである。我が娘も、かつてメキシコのグァナファト大学に留学したことがある。そのとき、周囲のいろんな人に、何やかやとお世話になったかもしれない。そう思えば、遠く母国を離れて学ぶ彼らに、若干でも激励になれば、恩返しというほどの大げさなものではないが、地球上のどこにあっても“ お互いさま ”じゃないかとの思いもあったからだった。

それに、実は――。

クッキングスクールの成果を今

一昨年、私は定年になってからすぐに、自宅(東京・昭島市)近くの、クッキングスクールに通っていた。現役中は、自分が厨房に立つことはほとんどなく、すべて妻に頼っていて、包丁の正式な使い方さえも知らなかった。でも、時間が出来た定年後は、料理の勉強をするチャンスでもある。元気な妻もいつ故障するかはわからない。そんな時どうやって食べていくのか。妻の食事は誰が作るのか。そうでなくても、お互いに助け合っていくのが、夫婦の生活の望ましいあり方だろう。

更に、自分で料理が出来れば、妻に余り負担をかけることなく、好きな時に自分の“ 悪友 ”をも呼び、いっぱい酌み交わすことも出来る。また、海外に出たときに、いろんな人を家に

呼び、話を聞き、話を伝え、交流を深めていくことも出来る、といった思いもあったからである。

クッキングスクールでは、まず包丁さばきから煮物の作り方、日本料理、中華料理、それに西洋料理の基本を学んだ。クラス８人ほどの生徒仲間は、主婦、新婚の若妻、結婚まじかの女子、それに私のような定年になった壮年だった。週１回、１年間の課程を終える頃には、かなりの手持ち“メニュー１８番”が出来ていた。

やってみると意外に面白い。男にはそれぞれの立場があり、考えがあり、意見(沽券？)もあると思うが、今まで料理なんて思ってもみなかった人も、是非一度、挑戦してみたらどうだろう。「男、厨房に入るべし」の時代である。きっと、新しい世界が開けてきます。

そんなことから、リスベスから話が出たとき、“よし、一肌脱いで、スペインでも料理に挑戦、若いみんなに喜んでもらおうか”なんて気持ちが、どこからか出てきていたのでもあった。

海外で寿司握りの“初体験”

10 月 19 日、土曜日。通年のクラスで席を同じくする８人が我が家にやってくることになった。朝早く起きると、私は電車で 20 分ほどのフェンヒローラの市場まで、買い物袋をさげて出かけていった。この間、妻は自宅で少しずつ日本食の準備を始めることにした。地中海に接したこの市場は、マラガ県の首都マラガにある市場と並んで、新鮮な魚が手に入るところである。前日からその日の朝にかけて、海からあがったばかりの魚や、近郊の野菜、肉、日用雑貨などがあり、早い時間から買い物客で賑わっている。

私は、10 軒ほどある魚屋の中で、まずお目当ての店へ足を運んでみた。

「あった、あった！なんとそれも、どでかいマグロの切り身が！」

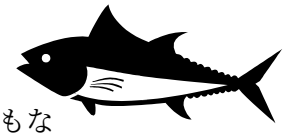
見るからに新鮮で真っ赤な色をしたマグロの赤身と、霜降り牛肉を思わせるようなトロの切り身。解体する前は２m 近くあったマグロだと思われる。何回かこの市場に来たことがあるが、こんなマグロに出会うのは初めてだった。マグロの入荷は、水曜日と土曜日のみ。いつも、出足が遅かったので、他の在住の日本人が買ってしまって、売り切れて無かったり、あっても色も品質もややあせたものが多かったからである。

スペインとマグロ。ご存知の方も多いと思うが、日本はカナリア諸島を拠点とした漁場から、相当量のマグロを輸入している。品質の良さから値段も高い。魚屋の主(あるじ)から聞くところによると、その日本に持っていくマグロの一部をここにおろしているのだという。日本人のマグロ好きを知っている業者が持ってきているようだが、在住日本人といってもそんなに多くはないので、ごく限られた量のみを置いていく。それで、すぐに無くなってしまう訳である。その上、最近では、刺身の味を知ったスペイン人をはじめ、近辺の外国人が買っていくことも増えてきているようだ。

ともあれ、大事なときに、素晴らしい“収穫”にめぐり会い、内心、喜びを隠しつつ、10 人分ほどのスシと刺身用に赤身とトロを買い求めた。更に、私の中華料理に使うイカ 2 はいと海老 40 匹ほどを手に入れた。どちらも、ぷりぷりと、見るからに新鮮である。

家に戻るとさっそくキッチンで料理に取りかかった。私の 18 番、「松の実とイカの炒め物」と「海老の辛み煮」である。材料野菜のセロリー、ねぎ、にんにく、カリフラワーと、一般の調味料はスーパーで。筍(たけのこ)、豆板ちゃ、日本酒は地元の中国食料品店で。松の実と化学調味料、それと刺身用のわさびだけは、日本から持ってきていたものだった。

一方、妻は母国を離れて独身生活をしている学生に、なるべく家庭的な料理をということで、ピーマンの肉詰め、若鶏のから揚げの煮込み、野菜サラダを用意。最後に二人でスシに挑戦することになった。



スシと言えば、巻き寿司は自分もクッキングスクールで教わった。でも、いわゆる日本の寿司店で出している握り寿司は、そんな必要もないから全く経験が無かった。そこで「相手は本来の日本食を知らない外国人学生。形が少しくらいおかしくても、味さえよければ喜んで堪能してもらえるだろう」と、自分で勝手な理由と解釈を作り出し、ごはんの握りに力をこめた。

スシは、小さなおにぎりのような仕上がりとなった。長方型にはなかなか及ばなかったが、上にわさびを塗ったマグロの切り身を置くと、結構いけそうなものとなった。

「してやったり！」。寿司握りの“初体験”である。しかも、外国でそれを経験、外国人に食べてもらうなんて、こんな素晴らしい体験はなかなか出来ないだろう。

女子大生を歓迎のキスで

昼食時間はスペイン・タイムに合わせてある。午後 2 時。準備がほぼ出来たところへアパートの玄関のベルが鳴った。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えた。小柄な自分が背の高い彼らに少しでも合わせようとの心と、靴で入ってくる彼らが遠慮しなくていいように、同じ物を部屋で履いている必要があったからだ。間もなく 8 人がぞろぞろと我が家に入ってきた。全員が大学のあるマラガ市内に住んでいるので、トレモリーノス駅まで揃って同じ電車に乗って来たようだ。

「ムイ　ビエンベニード！（ようこそ）」

私はエプロンをひも解くと、玄関に立ち、女子の一人一人とは両頬にキスし、男子とは力強い握手で来宅を歓迎した。学校内では、恋人同士でもなければキスすることもあまりない。でも、スペインで学校を外れたとき、親しい間柄での最大の歓迎の情を表わすのはやはりキスである。キスと言っても唇ではなく、両頬を触れ合うだけのもの。これをしないと却って、歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからである。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがある。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけだから、こちらも問題ない。還暦

を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、といえるのかも知れない。

来訪メンバーは、くだんのリスベス、彼女と一緒の部屋にいるテレシータ、ドイツのマイテ、スウェーデンのカタリーナ、マリーナ、メキシコのリスティ、イタリアのアレクサンドロ、それに日本の Y 子。更に、夏季コースで一緒だったスイス人のサラが、恋人と一緒に我が家の下に住んでいたので声をかけていたが、この日は友人の結婚式に招待されているということで、残念ながら出席できなかった。

自分たちを合わせて合計 10 人ともなると、比較的広いリビングも狭くなる。急きょ、テラサ(ベランダ)へテーブルを移し、ありあわせの椅子を全部出した。飲み物のうちビールは、国産のスペインのほか、参加者の国籍も考えドイツ、アメリカのものも用意した。

アパートのベランダで楽しい語らい

「サルー！」

歓迎の乾杯をし、食事が始まると、テーブルの上の料理はかなりの速いペースで減っていく。ほとんどが一人住まいの独身生活。それに体も大きく若さにあふれている。少し多目かなと思って作った皿も、どれも瞬く間にきれいに片付いていった。アルコールが少々入ってくると、談笑も一段と賑やかになっていく。話題はスペイン生活で苦労していること、母国での生活模様、つい先ごろの試験の結果等々。やがて、担任の先生の名前をあげ、教え方の特徴から、教材、教授法まで感想や批評を始めた。どの国にあっても、学校外で生徒の教師批判は同じである。

“ギター留学”の練習を披露

そのうちに、隣りの家のベランダでもフィエスタが始まった。お隣りはスペイン北部のバスク地方から来た一家である。親戚か友人かわからないが、5 人ほどがテーブルを囲みＣＤで音楽を流し、食べながら談論風発している。

はるか 1 キロほど先には、くっきりと抜けた青空のもと、濃紺の地中海が見える。アンダルシアの太陽は、10 月でも日差しは強いが、ベランダを吹きぬけていく風はもう完全に秋である。ひんやりとさわやかで肌に心地よい。その場の雰囲気の上昇に乗って、私は部屋に戻るとギターを持ち出した。まだまだ練習不足で上手でないのは自分が一番わかっている。でも、クラス仲間の輿になればと、思い切って弾いてみることにしたのである。

実はこのギターも、先生について 9 月から練習を始めたばかりだった。我が家のすぐ近くにギターの製作店がある。スペインといえばフラメンコとギター。日本にいたときにも少々のギター経験はあった。「ならば本場にいながら、腕を磨かない理由はないだろう」。そ

んな思いが高まって、こちらにも挑戦することになったのだった。“ ギター留学 ” である。幸いに、製作ギターの小売もしてくれるというので、そこで “ スペイン製ギター ” を買い、ついでに個人教授を紹介してもらった。

イグナシオ。35 歳。アルハンブラ宮殿のあるグラナダに住んでいるが、週末にはトレモリーノスの実家に帰ってきている。だから、土・日曜日だったら、我が家へも出張教授ができるというものだった。すでに自分のＣＤを 2 枚出し、作曲もし、ときどき個人とグループでのリサイタルを開いている本格的な音楽家である。

その彼に、週 1 回、教えを乞いながら練習してきた「ロマンセ・アノニモ(禁じられた遊び)」の前半部分と(後半部分はきわめて難しく、初心者にはとうてい無理である)、ギターの入門曲ともいうべき「グリーンスリーブズ」(電話で相手が出るのを待っている間によく流される曲)を弾いたのだった。

途中で 2 回ほどつかえたが、なんとか弾き終えると、全員が拍手を送ってくれた。「ブラボー！」なんて声もかかった。　もちろん、彼等の最大限の “ 激励 ” であろうことは私もわかっていた。でも、花束こそ無くても、拍手があっただけで、演奏者としては嬉しいものだ。人間は、注目される“ 晴れ舞台 ” があることも大切なのだ。

そうこうしているうちに 5 時になった。翌週の火曜日には私を含めほぼ全員が「スペイン中世・近代史」と「スペイン美術」の試験を予定している。少しは準備も必要だろう。こちらはいつまで家にいてもかまわないが、「タケシの家に行ったから出来なかった」では困る。その辺に気を使って、そろそろお開きの声をかけた。Ｙ子が気を利かして片付けの手伝いを始めた。さすが日本の女子である。と何人かの外国人の女子がそれに続いた。

かくして、我が家での初の会食会は終わった。

「ペスカード・クルード(魚の生料理)を初めて食べたが結構いけるネ」

「中華もレストランのもと違っておいしかった」

「タケシがこんなに料理を出来るとは知らなかった」

「ギターも弾くし・・・」

お世辞も含んだ感想だろう。仮にお世辞でも皆が喜んでくれて元気になればそれでよい。玄関を出て行く彼等を、再びキスと握手で見送りながら、私の心の中には、ふと全員の親代わりのような感情さえもこみ上げてきたのだった。

「またいつか、機会を見て呼んであげることになるかもしれないなあ・・・」

学生生活　第６報

「通年コース」（10～12 月）

10 月からは通年のコースが始まった。前期が 10 月から翌年の 1 月まで、後期が 2 月から 5 月までである。夏季コースの時と同じく、最初にクラス分けの試験があった。これまでの勉強成果が少しでも出た結果か、通年でもなんとか「上級」クラスに入った。授業は、

これまでの勉強を総括しながら、その完成を目指すものである。

日本人にはハンデが必要？

クラス仲間の 13 人は、ほとんどが自分よりもスペイン語を話せる。それぞれの自己紹介でわかったことだが、このうち８人はすでに日常的にはスペイン語会話に不自由していない様子だった。出身国は、スウェーデン(３人)、ドイツ、イギリス、イタリア、アメリカ(2 人)、メキシコ(2 人)、ブラジル、それに日本(2 人)だが、生まれがスペイン語圏のラテン・アメリカであったり、父親か母親のどちらかがスペイン人であったり、一緒に住んでいる恋人がスペイン人であったりしているのである。したがって、彼等にとってみれば、スペイン語といってもすでに母国語に近い。でも、文法的に正しく書いたり話したり出来ないので、改めて勉強をしなおしている、というものだった。

イタリア、ブラジルからの二人にとっても、スペイン語はイタリア語、ポルトガル語と同じラテン語を語源としたいわゆる親戚語。アレクサンドロ（イタリア）は言った。

「フランス語もやったけど、スペイン語はもっとイタリア語に似ている。そういう意味では勉強も楽だね」。マルシオ（ブラジル）の言葉はもっとショックだった。

「アルゼンチン、パラグアイ、ペルー、ボリビア、ベネズエラ等、周囲の国はすべてスペイン語。ふだんからいろんな交流はあるし、普通のブラジル人だったら、仮に勉強しなくても、意味するところの半分くらいは理解できるんじゃないかな。発音がポルトニョール(ポルトゲスとエスパニョールを混ぜた造語)になる傾向はあるけどサ」

なんということか！これじゃあ、全く語源の異なる日本語の自分などは、初めからハンデを背負っていることになるじゃないか。しかも、年齢的にもきわめて遅いスタートだ。クラス仲間は 20 歳前後から３０代まで。ここでも私が最年長の生徒となった。

クラスは午前１０時から午後２時まで、１時間ごとに 10 分間の休憩をはさんでの４時間。文法１時間、会話１時間、文化コース２時間である。文化コースは各科目とも約３週間（計１４時間）の短期間の授業で、最終日の試験が終わると次の科目が始まる。したがって、履修内容は部分的に集中化し、科目数が多くなっている。

「イスラム、ルネッサンス，バロッコの芸術」「ローマ時代からブルボン王朝までのスペイン史」「中世からバロッコまでのスペイン文学」「アンダルシアの歴史地理」「ジャーナリズムの中でのスペイン語」「現代朗読スペイン語」「スペインの経済」「商業スペイン語」「スペイン社会での女性の役割」「文学から映画へ――創造の世界」等々。

どの科目も、担当教師の話し方は、外国人向けに気持ちゆっくりで、理解できないところは質問も受けるが、法学部や文学部のスペイン人大学生を対象としたものとあまり相違が無いような気がする。クラスのみんなはごく普通にノートを取っているが、自分などは、内容を理解するより、話しているスペイン語そのものの理解に精力をそがれることが多い。それ

でも、単なる文法の規則を学ぶのと違って、スペインの歴史なり芸術の一端に触れられるのは、なんとなく文化的で楽しいものだ。

“我がドン・キホーテ”を語る

特に「スペイン文学」のクラスでは、中世、バロッコの文学史のなかで、私がこれから取り組もうとする、セルバンテスの「ドン・キホーテ」についても取り上げられたのはタイミングがよかった。担当教師のテレサは前日、私に声をかけてきた。

「タケシ、確かあなたはドン・キホーテに詳しいって言ってたわネ。明日の授業で出来る範囲でいいから研究発表をしてくれない？」

むろん、スペイン語による発表である。家に帰ると、私は急きょ、辞書を引き引き、自分なりの経験や知っていることをまとめた。

――なぜ、私がドン・キホーテなのか。それは、小学校の 6 年生までさかのぼる。学校の学芸会に、クラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私がサンチョ・パンサの役を演じたのがきっかけだった。以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの編集本を、大人になってからは全訳本を通読したものだった。また 10 年程前、職場の近くにある日本スペイン協会で、スペイン文学の権威・長南実先生による原書の勉強会があった。なんとか時間をやりくりして、私はそれに週 1 回、1 年余り出席した。更に、松本幸四郎がドン・キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」を東京で 3 回も観劇した。かなりの凝り性だったといえる。

ドン・キホーテもだが、サンチョ・パンサの言葉もいい。

「人間寝ているうちは、身分の高え者も低い者も、貧乏人も金持ちもみんな同じでさ」

「この世をおさらばして、地の中へはいるときは、殿様も日雇いも、同じ狭い道を行くし、たとえ、身分の上下はあったところで、法皇さまの体が寺男の体よりよけいに地面をとるわけはねえでがす」

・・・・・

二人の間でやりとりされる諺は、実に示唆にも富んでいる。正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、その従者サンチョ・パンサは物質主義の権化とも言える。セルバンテスは 58 歳のとき正編を、68 歳のときに続編を出版した。亡くなったのは奇しくもシエクスピアと同じ 1616 年だった。作品は近代西洋文学の原点ともなり、聖書に次いで世界で多くの言語に翻訳されている。物語はわかりやすく面白い。しかしながら、それをどの程度深く理解できるかは、読者の成熟の度合いにかかっているのではないか。何回か本に目を通した自分自身の体験からして、そう言えると思う――

発表を終えると、クラス仲間からは拍手が起こった。「トーキョーのドン・キホーテ、いいじゃない！」。私は、これまでに勉強し積み重ねてきたものを、若干でも発表できた嬉し

さに心の中ではやや興奮していた。テレサは私の話を総括しながら、更にさまざまな深い解説を加えていった。この科目の期末試験では、3 題目が自由課題となっていた。私は再び「ドン・キホーテ」についての自分なりの解説と感想を書き込んだものだった。

発音は英語よりやさしい？

文化コースの試験は、大部分の科目が小論文である。「イスラム、ルネッサンス、バロッコ」についての芸術科目などは、教室で学んだなかから、自分の最も書きたいテーマについて小論文をまとめる、といったもので、それなりに配慮があった。私は、先に妻と訪れ、興味と関心を引いたアルハンブラ宮殿の歴史・芸術的意義について書きまとめた。

スペイン語文法と会話は、本来「完成」を目指す、という段階にきているわけだが、自分などはまだまだの感もある。なかなか正確に発音できない言葉も一部ある。それでも、スペイン語についての大綱を一応学んできたこの機会に、日本語との対比について若干、触れてみたいと思う。なぜなら、言語の対比には、必然的に文化の対比また伝統や生活慣習の対比が映り出ているからである。

スペイン語は、スペインを初め中南米を中心に世界 21 カ国の公用語。現在、3 億 3 千万人が使用しているが、2050 年にはスペイン語人口は 5 億人を超えると予測されている。

一口に言って、日本人にとって、スペイン語は英語より発音しやすいのではないかと思う。それは、母音が日本語と同じ「アエイオウ」で、つづり字をそのままローマ字読みすれば、仮に発音の原則を知らなくてもほぼ通ずるからである。(私自身は、いまだに“べらんめえ調”の発音がよいという「rr」や、のどの奥から発音するという「j」などがうまく出来ないではいるが)　また、日本人には発音しにくい、英語のあの唇と歯を合わせるような「V」「F」とか、「ック」「ットゥ」などのつまった音は少ない。

ただし、文法は英語より複雑だと思う。特に動詞の活用が大変である。単数、複数、人称、過去、現在、未来、その上に過去には何種類もあり、しかも一つの表現が直説法か間接法かによって 40 余種に変化する。この活用をまず覚えなければならない。そして名詞、形容詞には男性、女性の「性」があり、これが定冠詞、不定冠詞とともに、文中ですべて一致しなければならないことが難しい。

半面、日本語のように相手の身分、年齢、社会的立場等によって使う言葉が異なることは、比較的少ない。初対面の人や、社会的に特殊な立場にある人を除いて、スペインでは大学教授も生徒も、年配者も若者も、兄弟も友人もほとんどが親しい間柄での呼称「tu」である。(中南米のスペイン語は、国によって若干の違いもあり、相手を呼ぶとき、より丁寧な「usted」が一般的という国が多い)

これに対し、日本語のやりとりを聞いていれば、およそ二人の上下関係はわかる。しかも、スペイン語には「豚児」とか「愚妻」といった謙譲の表現が少ない。いや、謙譲という姿勢や文化そのものが薄いのではないか。広大な赤土の大地、何回にもわたる征服と戦争の歴史、

強い太陽の光と情熱の国民性のもとで、湿気のある日本的な奥ゆかしさとか、謙譲の美徳などは育たなかったのでないか。

また、日本語には名詞に「性」が無く、動詞も単数、複数によって変化しない。半面、同意語、同義語の過多がある。伊東、伊藤、以東・・・、橋、端、箸・・・、感染、幹線、観戦・・・。パソコンのキーをたたくと「こんなにも」と思うほど出てくる。こうした言葉の違いが、人々の思考形態、行動の違いを生み出しているのも、もう一方の真理なのである。

俳句を生み出す日本の風土と

少し前、トレモリーノスから地中海岸に沿って西のマルベーリャに住む友人・ボルフガングを訪ねた。マルベーリャは気候のよさから、多くのヨーロッパの資産家が住む高級住宅地である。ドイツから移住して十数年、プール付きの大邸宅に住み、家の一部をミーティングの会場に提供している彼は、遠路ようこそということで、昼食に典型的なスペイン料理パエリャを用意してくれた。

誘われてテラスにあるテーブルに座った。秋とはいえ日中のコスタ・デル・ソルは暑い。外側に水滴を帯びたコップの水がいかにも冷たそう。海老を初め魚介類がふんだんに入ったパエリャのおいしそうな香りが漂ってくる。

「ケ・アプロベチェ(どうぞ召し上がれ)」

氏のすすめにフォークを握りかけてふととどまってしまった。

「・・・・・」

「いただきます」とスペイン語で言おうとしたのだが、言葉が出てこないのである。正確に言うと、「いただきます」にピタリ該当するスペイン語が無いのである。とはいえ、黙って食べ始めるわけにもいかない。そこで、私はどんな場面にも通ずる無難な言葉でその場を乗り越えた。

「グラシアス(ありがとうございます)」

フォークを口に運びながら、さんさんと地中海の太陽がふりそそぐパティオ(中庭)とプールを見ながらふと私は考えた。トレモリーノスでは、コスタ・デル・ソルに住む日本人の俳句の愛好者が月に一度、句会を開催している。自分も声をかけられて、いつかは是非と思っているが、忙しくて今のところまだ参加できていない。でも、いざ俳句を詠むだんになって、この光と影のコントラストの強い地中海の沿岸で、日本的な俳句の情感が果たして出てくるだろうか、なんて思ってみたりしたのである。打ち水からくる涼感、水墨の山水画などはいかにも日本の湿りの文化を象徴している。

プールサイドでは、金髪の幼い女の子たちがキャッキャと叫びながら遊んでいる。

「古池や　かわずとびこむ　水の音」

この芭蕉の名句や、短歌などに見られる「ワビ」とか「サビ」あるいは「幽玄」などといった感覚は、そうした自然環境に生きてこそ初めてわかるもののような気がするからである。

フルーツが出て、食後のコーヒーも終わった。「ごちそうさま」にピタリのスペイン語が無く、私は再びお礼の言葉にひとこと加えて言った。

「グラシアス」「エラ　ムイ　ブエノ(大変よかったです)」

このように一つの言語を学ぶということは、その言葉の出てくる発想体系、自然環境、更にその土壌となっている文化の違いをも知ることが大切になってくる。

ＤＥＬＥ(スペイン語試験)に挑戦

11 月にはいると「中級の上」から「上級」のクラスにいる仲間の多くが、勉強に一段と拍車をかけているのが目についた。午後の遅い時間からは、補習授業も行われている。ＤＥＬＥの試験準備のためである。

ＤＥＬＥ――Diplomas de Español como Lengua Extranjera――外国語としてのスペイン語の資格試験。セルバンテス学会とサラマンカ大学が運営、スペインの教育・文化・スポーツ省が証を授与する、スペイン語の世界では最も権威のある検定試験である。年に 2 回から 3 回、スペイン本国をはじめ、全世界の主要都市でも同時に行われる(2002 年、日本では東京、京都、福岡の三都市)。この上級の合格証書を持っていると、スペイン語に関係する企業・団体などに就職するのにも有利といわれている。英語のＴＯＥＩＣまたは、英語圏に留学するのに必要なＴＯＥＦＬの試験のようなものである。

私も、まずは「Basico(基礎)」(2002 年度から「中級」となった)から挑戦することにした。これまでの勉強の成果を図ってみたいこともあったからだ。

11 月 8 日、金曜日。午前 9 時から午後 1 時まで。読解、作文、ヒヤリング、文法・語彙と、休憩 30 分を含む約 4 時間にわたる筆記試験である。会場はマラガ市郊外にあるマラガ大学法学部棟の教室。午後 4 時過ぎからは、会場を市内の、いつも通っている外国人向けスペイン語コースの教室に移して会話の試験約 15 分。

作文は手紙の作成と小論文。会話は 4 コマ漫画を題材に面接官との対話のやりとりと、一つのテーマについて自分の意見を述べるものだった。会話の問題は受験者によって異なるが、私の場合、漫画は、スピード違反の車を追いかけ、運転手に罰金を課す警察官の役。面接官が運転手になって、さまざまな口実で罰金を免れようとする。それを、納得のいく理由と言葉でもって説得、了解させる、というものだった。

自分の意見を述べるテーマは 3 題の選択肢から「現代科学の発達と人間の幸せ」について選んだ。仏教徒また創価学会メンバーとして、常々こうした問題について考え、語り、行動していることから、まとめやすいこともあったからだった。

筆記試験が終わると、昼食は法学部の学生食堂でとった。100 人分ほどの椅子席があるゆったりとした室内。セルフサービスのカウンターに並び驚いた。皿によそってくれる分量の多さもさることながら、ジュースやコーラと一緒にビールの小瓶も並んでいたからである。先の順番の何人かもビールを取り出している。自分も、緊張から開放されてホッと一息。彼

等と同じくビールに手を出した。

ウイークデーである。他の教室では法学部の日常の授業も行われている。ビール瓶をそのまま口に運んでいる隣りのテーブルの学生は、れっきとしたここの大学生たちである。ことの良し悪しなどここでは論ずまい。ゆったりとしたキャンパス、明るくにぎやかな学生たち。楽しい青春に、堅苦しい注文などつけてはいけない！

四季もいつしか移り変わって・・・

夏の間あれほど長かった日照も、秋に入ると次第に短くなってきた。10 月最後の日曜日には、サマータイムから本来の時間に戻り、今までより 1 時間遅くなった。(日本との時差は 7 時間から 8 時間に)　冬至の頃になると朝 7 時でも暗い。8 時に家を出ると、まだ残っている街灯の灯りのもと、通学の道を駅に急いだものだった。夏の盛りには夕方 10 時近くまで照りつけていた太陽も、6 時前には隠れてしまう。全く降らなかった雨も、ときどき大地を湿らせていくようになった。

11 月も後半になると、ほとんどの通りがクリスマスのネオンで飾り付けられた。トレモリーノス市役所の前の椰子並木も、消防署前の木々にも、豆電球が取り付けられ、文字が読めるほどに明るくなった。デパートやスーパーには、チョコレートとクリスマス用品の山ができている。この限りでは、ここも宗教より商業主義が支配していると言えなくもない。

11 月 13 日、金曜日。2 時間目の授業の最中、隣りのクラスから「サンタルチア」のコーラスが聞こえてきた。「行ってきてもいいよ」と、先生も言うので、皆で教室を出て覗いてみた。消灯された部屋では、10 人ほどの女学生が教壇に立ち、頭上に冠のようなものをのせて歌っていた。彼女らのほとんどはスウェーデン出身とのことだった。

「サンタルチア」といえば、自分も確か中学校くらいの時に、日本語で歌ったものだ。懐かしさもあって同じスウェーデン出身のクラス仲間カタリーナに聞いてみた。

「ええ、母国では全部で 10 曲ほど歌うんだけど、最初と最後はこのサンタルシア＜発音はこの通り＞なの。サンタルシアとは、サンタが聖者、ルシアが光という意味なの」。いつの間にか他の教室からも来て覗いている。どのクラスの先生も、おおらかに“ 授業中断 ”を認めているようだった。

12 月 20 日、金曜日。今年度の授業の最終日だった。2 時間目が終わると、担当の教師が言った。「きょうは 3 時間目以降の授業はありません。2 階のロビーでクリスマスと終業を兼ねたパーティがあります。皆で参加しましょう」

2 階に行くと、テーブルにシャンパン、ジュース、菓子類、ケーキが並んでいた。学生たちはクラス仲間や担任教師と歓談している。ロビーはミニ国際広場となっていた。

年の暮れ。街行く人も、コート姿が増えてきている。それでも、昼間の海岸では、太陽を求め裸で日光浴をしている北欧からの人も多い。学校仲間の服装も、お国柄を映し出し、半そで姿からジャンバーまでまちまちで多様である。

春から夏へ、夏から秋へ、そして秋から冬へ。勉強と活動で忙しくすごしている間に、いつしかコスタ・デル・ソルの四季も移り変わっていっていた。

学生生活　第 7 報

兄弟が揃ってスペインを訪問

まさか、夢が本当に実現するとはなかなか確信がもてなかった。でも、皆が揃って来西、無事故で元気に帰国した。“ 旅行ガイド兼受け入れ責任者 ” としては、こんな嬉しいことはなかった。

――私のスペイン行きの話が出始めた 2 年前頃から、いつしか兄弟のなかで話が持ち上がっていた。「たけちゃがマラガの大学で勉強している間に、是非一度、スペインを皆で訪ねてみたいねえ」

戦前、戦中、戦後に生まれた私の兄弟は大勢で、男 3 人、女 2 人の 5 人だった。私はその 2 番目。次男である。兄は近年、喘息で苦しんだが快方に向かい、無理をしなければ海外旅行も問題はない、との状況になっていた。それぞれの連れ合いも一緒なので、合計 10 人である。

話が出たとき、当然ながら、まず費用の心配が出た。それに日程の調節も大変だった。男性の 3 人は 60 歳を越えたばかりだった。 1 人は私、他の 2 人は信州・伊那で農業や生花の温室栽培をしており、長期の留守は難しい。職場現役の男性 2 人は、仕事柄それなりに忙しい大事な立場にいた。女性も主婦業のほか、農業、花の手入れや出荷、事務所勤務等で忙しい環境にあった。

このうち何人かは海外旅行の経験があるものの、訪問先で言葉を操れるほどではない。旅行会社の添乗員付きのパック旅行なら心配ないが、自分たちだけのグループ旅行となると、飛行機や列車の搭乗手続き等も自分でしなければならない。

こんなさまざまな課題も、私がある程度スペイン事情に通じていて、なんとか言葉が出来ることが頼りとなった。それに、連れ合いを含めると、なんと 3 人がちょうど還暦を祝う年になっていた。終戦直後の何もかも乏しい中で育ち、後ろを振り向くゆとりもなく、文字通り汗にまみれて働き続けてきた。ちょっと贅沢だが「こんな素晴らしい記念のお祝いはない」との皆の気持ちが、夢の実現への力にもなっていたようだ。

さて、いざ海外となると、いかに安く、安全で、効果的な旅行に出来るかが求められる。まず、飛行機については、運賃が最も安くなる 1 月、私がスペインの日系旅行社を通じて航空券を手に入れることが出来た。全日空が出している「家族呼び寄せ便」である。成田――ロンドン――マラガ往復で 700 ユーロ。(土曜出発の値段。ウイークデー出発だと 645 ユーロ)。ホテルも閑散期なので安く、4 つ星ホテルでツインが 1 泊 60 ユーロ(トレモリーノス、セビリア)から 120 ユーロ(マドリード)だった。一人当たりにするとこの半額である。

タクシー代、食事代(レストランのランク、食事内容にもよる)も安く、結果的に、成田を

出てから帰るまでの総費用は、一人当たり 1200 ユーロ強（約 15〜16 万円）であがった。このほか、全員が伊那なので、成田までの往復の交通費(貸切マイクロバス)や成田前泊のホテル代、パスポートの取得や海外傷害保険等の費用もかかっている。

次に、時期は、旅費も安く、農閑期、職場現役の人も休暇が少なくてすむ 1 月の「成人の日」の連休を活用、11 日から 16 日までの 6 日間(スペイン滞在 4 泊 5 日)となった。それぞれ、職場の関係者の理解を得て仕事を調整。留守中の温室の管理をしてくれる人を見つけ依頼した。大雪や霜の心配もしなくてはいけない。

ガイド役は私だったが、当初はスペインのマラガ空港まで皆で来てもらうつもりだった。でも、やはりロンドンでの乗り換えが心配になった。広大なヒースロー空港には 4 つものターミナルがあり複雑に位置している。その間をバスで移動しなくてはいけない。

そこで私は、1 月末に日本で予定されていた所用を 1 ヶ月はやめ、12 月に一時帰国することにした。そうすれば帰りは皆と一緒に来ることが出来る。また、留守を預かってくれている子供たちとも、年末年始を一緒に過ごしてあげられる、との妻と私の思いもあったからだった。この案は結果的にすべて良い方向に結びついていった。

コスタ・デル・ソルの遊歩道

かくして、スペイン 4 泊 5 日の旅が始まった。訪問地は、南スペインのマラガから私の住むトレモリーノス(アパート訪問も)、ミハス、セビリア。ここから特急ＡＶＥでマドリードへと北上した。あいにく、この時期、ヨーロッパ全体を覆った寒波に見舞われたが、「きっと信州の寒波をみんなが持ってきたんだに」といった冗談も飛び交った。

タクシー乗車の際には、一行を 3 班に分け、第 1、第 2、第 3 車両と、スペイン語がある程度出来る妻の助力もあってすべてがスムースに運んだ。詳細は略させていただくが、いくつものエピソードも生まれた。旅が皆の貴重な思い出になるとともに、これからの人生のバネになっていくことを願っているところである。

――“ 定年留学 ” が、思わぬ展開で身近な人々にも役に立てたという嬉しい体験である。この間、クラスは 6 日間ほど “ 届出欠席 ” となっていた。

仏教についてクラスで語る

1 月 17 日、久しぶりにクラスに戻ると、会話の時間に担当教師のインマから思ってもいなかった要請があった。

「タケシ、今度、都合の良いときでいいんだけど、この教室で仏教について語ってくれない？あなたの留守中に、たまたま仏教が話題に上がったの。きっと仏教徒のタケシからだったら、もっと詳しい話が聞けるんじゃないかナって。そこでみんなで頼んでみよう、ということになったの」

「ウン、ぜひ聞いてみたいよね。タケシ、どう？」。
クラス仲間の何人かも歩調を合わせるように呼びかけてきた。
なぜ自分へ？ふだん校内では､仏教について個人的に友人と語ったことはあっても公に話したことはない。ただ、自己紹介の際に自分の立場を詳しく述べたので、そこから皆が私に声をかけたのかもしれない。頼まれれば特に断る理由もない。いわば自分の“ 専門分野 ”だ。［ＯＫ、じゃあ来週にでも］ということになった。
これまでも、会話のクラスでは、日本で考えれば驚くようなテーマもあった。環境問題など真面目な課題のほか、若者の性動向、同性愛、妊娠中絶、麻薬問題等を女子学生でも平気でオープンに取り上げてきている。ならば、私も学問的要素を含めながら、自分でなければ語れない内容についても触れるようにした。
――仏教の起源。ここでは特に、釈尊が東西南北の城門で見た、生老病死の人間の四苦とその解決の道を究めるために出家したエピソードを。その後、南伝仏教(小乗)、北伝仏教(大乗)としてアジア各国に広まった経緯。日本への伝播から鎌倉時代に出た日蓮。その教義を基底に現在、平和、文化、教育の活動を進めている在家団体の創価学会。その世界的広がりであるＳＧＩ(創価学会インタナショナル)について等々。この部分は、「一般論から外れるけれども」と、自分の立場を明確にした上で話した。教義面では、神と仏の違い、生命の永遠、十界論のさわりを説明した。
終わると質問や感想が次々と飛び出してきた。
「チベットだったっけ。ほら、あのダライ・ラマの仏教とはどう違うんだい。グラナダ（マラガの北方にある都市）にも、何か建物があるようだけど」
「仏教というと、イタリアでは確か『セン』(「禅」のこと)について聞いたことはあるけど、ＳＧＩってまだ聞いたことはないね」
「スペインの中で、仏教徒はどんな存在なの？」
・・・・・
担当教師のインマも次々と質問を投げかけてきた。私は、それらに対して、知る限りの返答を試みたが、残念ながら十分に答えられないものもあった。欧米では、宗教が人格形成の基礎であり、宗教を信ずることは人間として当然の営みであると考えられている。教室で見たヨーロッパ各国の仲間も、それなりに宗教に強い関心を抱いているようにも思えた。
「世界では無宗教の人は信頼されない」とも言われる。宗教は文化の揺籃である。海外に出れば、どこにあっても“ ニッポン代表 ”。出来れば日本の文化、宗教について、少しでも語ることが出来たら素晴らしいと思う。

仲間たちの人生模様

1 月 28 日、火曜日。前期コースの期末試験が行われた。私の場合、文化コースの科目は夏季の授業で履修済みだったので、文法と会話の試験のみになった。昨年 10 月から 4 ヶ月

間の勉強の総決算である。とはいっても、今更、試験のための準備などはあまり意味がない。これまでの培ってきた総合力を反映する以外にないからだ。

ありがたいことに、試験内容にも、みんなのこれまでの努力を認めよう、評価しよう、との配慮が見られた。文法担当のラファエルははっきりと言った。

「ボク個人としては、こうした試験にあまり賛成ではないんだ。試験をしなくてもみんなの実力、努力は毎日の授業でボクが一番わかっている。でも、学校のシステムとして、形としてでも試験をしないと困る、と言うんだ。ま、すでに『全員が及第』は決まっているから、気を楽にして、学んだものを存分に発揮してや！」

会話の試験は、テープに録音された新聞記者のインタビューの内容聴解と、作文だった。作文のテーマは 5 種類あったが、誰でもが自分の得意とするテーマを選べるようになっていた。作文は自分にとって、比較的得意とするところだったが、聴解はさすがに「上級」だけに難しかった。ところが驚いたことに、終了後、仲間の何人かは言った。

「ウン、大部分は聞き取れたヨ。そんなに難しくなかったしサ・・・」

ということは、彼らとそれだけの“差”が出来ているわけだ。

――そりゃ、吸収力のある若い学生と同じようになろうと思っても無理だろう。しかも、母国語がヨーロッパ系の彼らには、語源的に全く異なる自分などより、はるかに取り組みやすいわけだから――なんて、自分なりに納得させているが、これはすべての日本人に共通する気持ちだと思う。これから語学に取り組む方もどうぞ安心してください。私も、この年で、若干でもスペイン語が進歩し、若い仲間と楽しい学生生活が送れただけで大満足でいるところですから。

大学の受講証書

試験が終了すると、クラスを代表してスウェーデンのマリーナが、お世話になったラファエルとインマに記念品を贈呈した。セビリア焼きの料理皿。皆で心ばかりのお金を集め買ってきたものだった。

「素晴らしい生徒たちに恵まれ、楽しく授業を続けることが出来た。これから後期のコースを取る人もいるし、別の道に進む人もいると聞いている。どこの国、どこに行っても、健康にだけは留意して頑張ってや。心温まる記念品、本当にありがとう」。心なしか目を潤したラファエルの言葉だった。

続いて、全員で母国の住所や電話番号、Ｅメールアドレスの交換をすると、大学近くにあるカフェテリアで打ち上げの昼食会をもつことになった。

午後 2 時過ぎ。少し前までヨーロッパ全体を襲っていた寒波も消え、マラガにコスタ・デル・ソル本来の冬が戻っていた。真っ青な空。燦燦とふりそそぐ太陽。摂氏 18 度。皆は戸外のテーブル席に輪になってすわった。前期コースが始まった当初には 13 人いた仲間も、昨年末には 5 人が母国に帰り、今は 8 人と減ってしまった。少人数になっただけ、お互いの親密度も増している。

ビール、サングリア、コーラ、タパス(いわゆる酒のつまみ的な料理)が出てきたところで、

それぞれの進路を聞いた。

マルシオ　ブラジルはサンパウロ出身。アメリカの大学を出て、マラガから西に電車で40 分のフェンヒローラでホテルのアルバイトをしながら通学していた。しばらくは独学をして今後を考えるという。

アレクサンドロ　イタリアはローマから。もともとフランス語、英語そしてイタリア語が出来たのにスペイン語が加わった。ここコスタ・デル・ソルにはヨーロッパ各国からの観光客が大勢やってくる。そこで旅行業のマネージャー的な仕事を探すという。

マイテ　ドイツからの女子大生。頭の回転が速く最も出来のよい生徒だった。しばらく休んで体調を整え、また勉強を続ける。

マリーナ　2 月中旬にストックホルムに帰るという。北欧はまだ日中も温度は零下。家族のもとに帰るのは嬉しいけれど､明るいスペインから夜の長い母国に戻るのはやや憂鬱とのこと。「でも、白夜のスウェーデンは素晴らしい。是非、みんな夏に来てネ」と。

カタリーナ　同じくスウェーデンの出身。これからイギリスへ美術留学を希望している。現在、ロンドンの大学と美術学校に願書を申請中。申請には作品も何点か送らなければいけない、ということで今、絵画の作成に忙しい。

ベロニカ　彼女もスウェーデン出身だが、こちらでスペイン人と結婚。現在、妊娠中で 5 月には出産予定という。そういえば、教室でも体つきが丸みを帯びていた。ラファエルが言った。「赤ちゃんが生まれたら、大学に見せに来てね」。彼女は嬉しそうに答えた。「ええ、もちろんですとも。喜んで来ますワ」

そして日本からのN子。タケシもまだ勉強は続くが、しばらく大学は休み、今後を考えることにした。新聞やテレビ、街のスペイン語の実地勉強も大切だ。それに地方やヨーロッパの国々も訪れたい。

「近い将来、キミたちの国を訪問することになるかもしれない。その時はヨロシク頼むね」

「もちろん、もちろん。大歓迎だよ」

「日程が決まったら、メールで早く教えてネ」

皆から掛け声と拍手が起こった。すでに帰国した友からも、その後の生活を綴ったメールが届いている。

クラスは違うが、アフリカに関心を持ち、日本語をかなり話せる韓国人(夫人はフランス人)や、将来スペインで仕事を探したいという勉強熱心なイラン人とも友達になった。なかには、母国での兵役義務を合法的に免れるために留学している学生もいて、現代世界の歴史のひだを肌で感じたものだった。

それぞれの出身国の状況、文化的背景は異なっても、校内ではすべて楽しい仲間だ。いずれは、母国で重要な立場で活躍する人も出るかもしれない。国境など全く意識しない友情の

輪の広がり――これだけでも、海外留学の多大な収穫といえる。

“定年留学”の仲間もいた！

2月半ば、前期コースの修了証書の受け取りと、今後のコースの確認のために大学に出かけた。後期コースはすでに始まっている。ここにはなんと、私と同じ“定年留学”の仲間もいた。

身長175センチほどのがっしりした体。血色のよい赤ら顔に白髪。マラガ大学が給付してくれた布鞄を肩から斜めにかけて通学路をはつらつと闊歩。校内では若いクラスメートに冗談を交え声をかけ、輪に溶け込んでいる。

グラハム・ラングレイ。カナダの出身。まだスペイン語は勉強を始めたばかりなのでクラスは「初級」。校内のロビー。込み入った会話は英語でとなった。

――ご同僚！ずいぶん若々しく動いているけど、何歳ですか。ボクはまもなく62歳。ほぼ同じくらいに見えるんですけど。

「40歳ヨ。精神年齢はネ。ふだんは年を聞かれても言わないようにしているんだ。どうしてもと聞かれれば、この精神年齢を答えるのさ。あんただからこっそり言うが、本当の年齢は、ちょうど70歳ヨ」

――ホー、そんな年にはとても見えませんね。で、カナダからなぜマラガの大学へ？

「昨年、中米のコスタリカに行ったんだ。自然が美しい。気候も快適。人もいい。生活費も安い。すっかり虜になってそこにしばらく住むことを決意した。となればスペイン語が必要となってくる。それでマラガ大学に来たんだ」

――だったら、初めからコスタリカでスペイン語を勉強できるじゃないですか。

「去年、フランスにいた時、この大学の評判を聞いたのさ。伝統があるし、また冬場は暖かいし、ゴルフも出来るし・・・」

――ところで、現役時代の仕事は何を？また何歳で定年退職？

「機械関係のエンジニアだったよ。カナダでは65歳定年が一般的だが、自分は10年前に60歳で退職し会社を興した。社長兼使用人で、わし一人だがね。働いていた時の給与の4分の3ほどの年金が出るから、年金だけでもよい生活が出来るけどね」

「そう、定年後、暖かい地を求めて、東海岸の人はフロリダへ、西海岸の人はアリゾナに住み着くケースが多いね。でも何か創造的なことや人の役に立つことをしていないと老け込んでしまうと思うんだ」

――全く同感ですが、いつ頃からそういう気持ちを持ち始めたんですか。

「55歳の頃かな。仕事でタイやオーストラリアに行っていた時、たまたま読んだ本に触発されたんだ。『若いときに出来なかったことを定年後やれ』『そのためには、定年5年前くらいから準備を始めることが大切だ』ってね」

――で、コスタリカではどんな生活プランを？
「何か役に立つこともしなくちゃ。それで皆に英語を教えてあげることを決意したんだ。そのためには教師の資格も取らなきゃならない。だから、この大学を終わったら“ How to teach English”(英語の教授法)のコースも取ることにしているんだ」
「家にいて楽な生活をしてテレビばかり見ていると早死にするよ。人生やることがいっぱいあるんじゃないかナ。ボクはこれからまだ 80 歳まで頑張るヨ」
妻はすでに亡くなり、カナダには子供 2 人がいるという。この元気！このやる気！ずいぶんと触発された“ インタビュー ”だった。

「全 7 報」をスペイン語に翻訳

1 月末にクラスが終わると、時間的なゆとりも出てきた。そこで 2 月、3 月とかけてこの本の前半「学生生活全 7 報」のスペイン語訳にとりかかった。大学の関係者に記述内容の確認をしてもらうことと、スペイン語がこのレベルまで至ったことをお世話になった先生に報告するためだった。
翻訳が 4 月初めに一段落すると、ラファエルのところに持っていった。ちょうど 1 週間かけて目を通してくれたラファエルは、内容のみならず、文法や表現の誤りまですべてチェックしてくれたのである。原稿は相当量のページに及ぶ。それに手を入れてくれるなんて、個人教授でもなかなか出来ないことだ。赤字の入ったスペイン語原稿は、私にとっては、かけがえのない宝となった。
これでは、謝礼を差し上げなければ申し訳ないと思った。
ところが――。
「こちらこそ御礼を言いたいところだ。キミの原稿を読みながらずいぶんと勉強させてもらった。東洋と西洋の文化比較、日本人とスペイン人の考え方の違い等々。この大学にもいっぱい日本人学生が来るから、彼らに合った授業を進めていくためにも、いろいろと役立つヨ。それに定年後の生き方も、スペイン人にも共通してくる問題だし・・・・」
氏はときどき、スペイン語で俳句を詠むなど、日本の文化や仏教にも深い関心を寄せている。私も、この機会に日西の文化交流や相互理解の深まりに、微力なりとも役に立っていくことが出来れば、と心に誓ったものだった。

各地を訪ねて

海外では、クラスでの勉強のみならず、居住する町での人々との触れ合いや交流、また各地を旅行することも留学生活をより充実、広げてくれる。学んでいる外国語の生きた実践の場ともなる。私が訪ねた各地で見、感じ、遭遇したエピソードの一端を**「飛行機に乗ったドン・キホーテ」**に掲載していますので、お手数ですがそちらをご覧ください。

訪問地は次の通りです（レポートの掲載順に）。

マドリード
セゴビア
トレド
グラナダ
セビリア
ジブラルタル
バルセロナ

コスタ・デル・ソルの生活

「年間 300 日が晴天」

ここで、マラガ、トレモリーノスのあるコスタ・デル・ソルでの生活について紹介しておきたい。Costa del Sol――英語に訳せば Coast of Sun つまり「太陽の海岸」の意である。スペイン南部アンダルシア州の地中海に面した美しい海岸一帯。温暖な気候のためヨーロッパ有数のリゾート地となっている。

スペインの南部は、8 世紀から 15 世紀末まで、長い歳月の間、イスラムの影響を受けてきた。現在もセビリア、コルドバ、グラナダなど各地に観光遺産として残っている。果てしなく続くオリーブとひまわり畑。明るい太陽の下に「白い村」が点在する。フラメンコ、闘牛の本場でもある。

コスタ・デル・ソルの海岸

「年間 300 日が晴天」と案内書にもあるが、その通り、5 月に渡西してからの半年間、一度も雨らしい雨は降らなかった。毎日、抜けるような青空と、まぶしすぎるくらいの太陽の光が注ぐ。真夏には摂氏 35 度を超す日もあるが、乾燥しているので、日本のような蒸し暑さにはならない。冬には雨がときおり降るが、気温が摂氏 10 度以下に下がることは少ない。

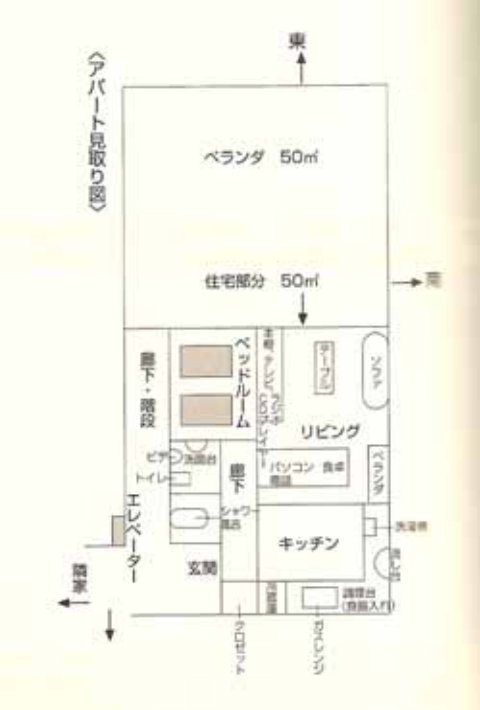
マラガはこのアンダルシア州にある 8 県のうちのマラガ県の首都。人口約 60 万。コスタ・デル・ソルの玄関口で、ヨーロッパ各地からの直行便がある。私も日本との往復を、成田→ロンドン→マラガの経路にしている。ピカソが生まれた町としても有名。生家の記念館もある。

その西のトレモリーノスはコスタ・デル・ソルを代表する町の一つ。イギリスやドイツ、北欧からの観光客、長期滞在者が多い。人口約 4 万。さらに西のマルベーリャが、世界の富豪たちが集まる高級リゾート地なのに対して、ここは庶民的な町としてスペイン人にも人気がある。マラガまで電車、バス共に 30 分弱で行ける。私も、大都市マラガよりも治安のよさと落ち着いた雰囲気から、居住地としてトレモリーノスを選んだ。さまざまな国からの

滞在者がいるので、人種的な偏見もなく、地元の住民感情も良い。

食材は豊富で値段も安い

賃借のアパートは、トレモリーノス駅(電車、バスとも)から徒歩 4 分くらいで通学には便利がよい。新築のアパートの 4 階、50 ㎡の１ＬＤＫだが、リビングは日本の家のものより広い。それに 50 ㎡の広いベランダがついていて、大勢の来客の際にはここで会食もできる。家賃は生活に必要なすべての家具付きで月 600 ユーロ。それに水道光熱費・管理費が 60 ユーロ。居住の 10 世帯の国籍は多様で、我が家の隣りはスペインのバスク地方からの家族、すぐ階下には若いスイス人のカップルが住んでいる。



観光都市のため、街の清掃、ゴミの回収はよく機能しており、いつでも何でも家の近くのコンテナに入れることが出来るのは便利である。アパートの近くには大きなスーパーがあり、道路に沿って小売の食料品店、雑貨店も多い。私も時々、妻と一緒に買い物に出かける。　　物価は全般に日本よりも安く、肉、魚、野菜、果物等、日本的な食品を除いて、ほぼ何でも手に入る。しかも新鮮でおいしい。

妻にとっても、そうした食料品や日常雑貨は、現物を見て買うことが出来るので、仮に言葉が十分に通じなくてもなんとかなる。日本では見ないような魚の調理法は、同じ買い場にいるスペイン人の主婦や店主に聞くこともあるようだ。日本食品については、中国系の食品店や雑貨店でかなりのものを扱っている。台湾製のインスタントラーメンなども結構おいしく値段も安い。

日本食レストランは、コスタ・デル・ソル全体で数件のみ。これに比べて、中華料理店はトレモリーノスだけでも 100 軒近くあるように見える。かつて南米の各国を訪れたとき、アマゾンやアンデスの奥地にも中華料理店はあった。このように、中華料理が世界に浸透したのに対して、日本料理は、健康食として先進国の一部の市民に人気が出てきているが、まだすべての民族や階層にまでは至っていないようだ。全般にユッタリズムのスペインだが、ここでもアメリカ文化の典型とも言えるファーストフードが、市民や観光客の間にも急速に浸透している。

にんにくと香辛料の並ぶ市場

便利な生活の足、バスとタクシー

日常の生活・活動の足は、電車とバス、それにタクシーである。道路は全体によく整備されており、遠距離では大型バスが時速 100 キロを超える高速で走っている。街の中では、２つの車両をつないだ長いトレーラー型のバスも多く、市内は一律の代金（0.8～1.0 ユーロ＝市によって異なる）で、市民の便利な足になっている。

乗車は前方の乗降口からで運転手に料金を払う。そこにはミニコンピュータが設置されていて、代金のほか日付け、時間、分まで印刷された薄紙の切符が出てくる。降車はブザーを押して後方の扉から。乗降車口とも、日本のバスのそれより低いので、年配者でも幼児でも乗り降りしやすくなっている。

タクシーは大都市を除き、メーターの無いものが多く、乗り降りの際に聞か (交渉し) なければならない。まれにふっかけられて高い料金を取られることもあるので注意が必要。行き先を告げ、最初に料金を確認するのがコツである。自動開閉のドアではないから、いつも後方に注意しながら自分で開ける。いずれにしてもタクシー料金は安いので、急ぎの時は便利である。

ユーロ導入で物価上昇か？

便利さといえば､昨年から通貨がペセータからユーロに変わったことである。イギリス等、一部の国を除き、今やヨーロッパのどの国に行っても、あの面倒な通貨の交換は必要としない。今後、加盟国は更に増えようとしている。それぞれの国の経済の発展度は必ずしも同じレベルではない。数百年の歴史ある自国の通貨を捨ててユーロを採用した、未来を見据えたそのヨーロッパの決断と勇気には脱帽する思いである。

半面、ユーロ導入の際、ペセータの端数切り上げの便乗もあって、スペインの物価は少しずつ上昇している。それでも、日本に比べればまだはるかに安い。一番気になる生活費のことだが、私の場合、妻と二人で 1 ヶ月約 1400 ユーロ(内、家賃 600 ユーロ)。学校関係の費用が約 300 ユーロで計約 1700 ユーロ。それに各地を旅行したり、一時帰国など特別出費があればその分が加算される。それと、日本の留守宅の管理費(税金を含め)が加わることも考慮しなくてはいけない。留守宅の管理は夫婦で海外に出る場合、大事な課題となる。専門の管理会社に委託するか、家族や親戚あるいは隣人に頼むか等々。私の場合、幸いに子供がそのまま居住してくれたので問題は比較的簡単だった。

「郷に入ったら郷に従え」

住みついたばかりの日本人にとって、不便というか気にかかるのは、時間のルーズさと、商店、スーパー、デパートなどでのサービス精神の欠如である。私自身も、買い物をしていて、日本のように「お客様」として大切に扱われたような経験は、残念ながらあまりない。

この点は、スペイン人自身も認め、これから改善をしていかねばいけない、と思っている人も多いようだ。

「郷に入ったら郷に従え」――地元の文化、習慣を尊重しながら、良い面を学び合っていくことが必要だろう。海外に出たとき、訪れた国が日本ほど物資が豊かでなかったり、近代化が遅れていることを見て、その国を下に見ようとする日本人もなかにはいる。でも、二つの国の生活水準だけ取り上げて比較することは意味が無いだろう。どっちが上で、どっちが下だとか、どっちが進んでいて、どっちが遅れている、とかいった単純なとらえ方・・・。

マラガ大学の教師ラファエルが語ったことがあった。

「少し前のことだけど、勉強熱心な日本人の男子学生が自分のクラスにいた。ある時、仕事への取り組み方が話題になった。彼はクラスで得意そうに言ったんだ。『日本のサラリーマンにとって、会社は最も大事な存在。だから、みんな働き者で、会社の業績を上げるためにウィークデーは残業し、土・日に家にいても、翌週の仕事のことを考えているんだ』って。そこでボクは言ったんだ。『スペインでは、ウィークデーの仕事中も、今度の週末には何をして楽しむか、そのことばかりを考えているんだよ』って」

世界には多様な価値観、人生観があることを知らねばいけない。

科学の進歩が即、人間の幸せをもたらす、という短絡的な思想。文明から離れた島で幸せに暮らす未開民族と、物は豊かでも大都会の危険やストレスの中での忙しい人々の生活。平安時代と現代の人間とどちらが幸せか。あるいはもっと簡単に、今の時代の子供と自分が子供だったときの時代と、どちらが良かったかなんて簡単には決めつけられないだろう。“進歩信仰”に毒され、外国からは、日本の古い伝統や文化が高く評価されているのに、日本人自身がそれを忘れ、どんどん失っている面もある。

物とお金が中心で、文化や人間の心の無いつながりは、顔の無い国を作り出してしまう。“メイド・イン・ジャパン”は知っていても、日本または日本人については知識も意識も薄い外国人が多い。幸いにも、昨年のワールドカップで情況はかなり好転しているような気もするが・・・。

小さな小さな“民際外交”

そんなことから、私は大学の教室のみならず、街角の写真屋で、魚屋で、テニスの練習で、出来るだけ日本の本当の姿を伝えようと交流を心がけてきた。

アパートから歩いて 5 分ほどの街角の写真屋の店主は、私のスペイン語の“個人教師”にもなっている。

「オラ！コモ・エスタス？(お元気ですか？)」

フィルムの現像や写真の焼き増しを頼む時、私のスペイン語をホメながら間違いを直してくれるのである。白く禿げ上がった頭に満面の笑顔。若い美人の助手も愛想よく会話に加わる。カウンター後方の棚には、コダックフィルムと一緒に富士フィルムがすらりと並んでい

る。

店主は注文の 1 個を取ると私に手渡しながら言った。

「やっぱり日本のフヒフィルムは、一番いいヨ」

――「フジ」でなく「フヒ」である。そこで私も愛想よく言ってあげた。

「そう、スペイン語で『JI』は『ヒ』と発音されるけど、これはモンテ・フジ(富士山)の『フジ』。固有名詞だからやはり『フジ』の方がよいと思いますヨ」

たわいないやりとり。でもお互いにこれで親しみがいっそう増す。小さな小さな“民際外交”である。

セビリア駅のトイレの改善を提案した手紙に、同駅駅長から丁重な感謝の手紙が届いたこともある。スペイン語がもう少し進歩した将来は、こちらの新聞に、両国友好に役立つなんらかの文を寄稿できればとも思っている。

トレモリーノス消防署の訪問

6 月 20 日、スペインには珍しく Huelga General(ゼネスト)があった。前日のクラスが終わる際に、担当教師が言った。「明日はゼネスト。今回はストに賛同する人も少ないけれど、電車もバスもほとんど止まるし、ピケもあるかもしれない。登校しても帰れないかもしれないから、明日は出席は取らない。自分たち教師陣は出ているので、大学の近くに住んでいて来られる人については対応する。でも、来られない人は自宅待機でよろしい。その代わり宿題を出すからそれをやっておくように」

残念なような、ありがたいような、また「宿題」に迷惑のような・・・。ともあれ、午前中が休みとなったので、以前、M氏から話のあったトレモリーノス市の消防署を訪問しようということになった。ゼネストとはいえ、病院、警察、消防署などは、緊急事態に備えて職員も待機していると思ったからだ。

午前 10 時。トレモリーノス市役所のすぐ後方にある消防署へ向かった。消防車の車庫の前では、3 人の消防署員が立ち話をしていた。そこで私が通訳となって、M氏の紹介と訪問の目的を告げた。

M・K氏（**写真中央**）。62 歳。大阪市消防本部管内の消防署の副署長をしていたが、2 年前に定年退職。消防生活 40 年。身のこなしが敏捷で、今なお民家の屋根の縁伝いも出来ると言う。定年後は、夫人と世界各地を観光で回っていたが、このコスタ・デ・ソルには、特に惹かれて約 3 ヶ月滞在、ここを拠点にスペインの各地を回っていた。

訪れた先で消防車や消防署に遭遇すると、“かつての血”がうずいてくる。トレモリーノスの消防署を見つけたとき、是非一度、訪れて消防の組織や消防車の機能について聞きたい

と思っていたという。

署長、副署長が熱心に応対

そんな探究心の旺盛なM氏を迎えた 3 人は、突然の訪問にもかかわらず、すこぶる愛想よく応対、現場を見せ、懇切丁寧に説明してくれた。幸運にも 3 人のうち 1 人は署長、1 人は副署長とすべての状況がわかり責任もある立場だった。

M氏は、大阪、または日本の消防署の状況を伝え、機材に触りながら、質問をしていく。日本では 1959 年に、各市町村単位に自治体の消防が発足した。現在、大阪市消防本部は「消防局」として、大阪市役所の一部局となっている。区単位に 25 の消防署を配置、消防職員数 3,600 人、消防車両約 500 台（ポンプ車、タンク車、はしご車、レスキュー車、化学車、飲料水補給車、指揮車など）、救急車約 80 台。年間の火事が約 1,500 件等々。

ここトレモリーノス市は人口約 4 万、全部で 45 人の署員という。それが 4 グループに編成され、ローテーションを組んでの勤務となる。一人についてみれば、1 日 24 時間勤務すると 3 日間の休みがあるという。つまり月曜日に 24 時間働けば、火、水、木と休みで、次の勤務は金曜日になる。

M氏によれば、日本は 1 日 24 時間勤務の後、24 時間の休み、そしてまた 24 時間の勤務で月 8 日の休日がある。有給休暇は 20 日間。こちらは 30 日間の有給休暇。それもバケーションとしてずっとまとめて取れるという。一般企業でも有給休暇を 1 週間以上まとめて取るのが難しい日本と比べて大きな違いである。「だって、これはヨーロッパ全体に共通する基準ですよ」とこともなげに言う副署長の言葉に、欧州社会のシステムと考え方の違いそのものを痛感させられる。

4 台の消防車のうち 1 台がひときわ大きかった。「日本は道が狭くて、火事のときに大きな車はなかなか現場まで入れないことがあるんですよ」とM氏。確かに、トレモリーノスも、裏路地に入れば狭いところもあるが、全体に日本の都市より道路幅は広い。そして 1 台の消防車には 1,500 リットル(大型車には 3,500 リットル)の水を積載しているという。

「この水だけで 99%の消火はＯＫです」との副署長の説明には、私自身が驚いた。「消火栓、防火用貯水池、川などの水は必要ないんですか？」。私が問いただすと、「消火栓もあるけれど少ないね。現実にはあまり必要としないしね。家はコンクリート作りで、延焼する可能性が少ない。だから自分たちは、建物の中に飛び込んで消火するんだ」。

なるほど、木造で延焼しやすく、外から放水する日本の家屋との違いが、ここでも映り出てきている。

かつて、ボリビアの首都ラパスを訪れたとき、つい近年まで消防署が一つもなかったと聞いて驚いた。なぜか？それは海抜の高さから来ていた。ラパスは標高 3,600 メートル。まさに富士山頂である。だから、火が燃え出しても、酸素が少なくてなかなか燃え広がらないから、というのである。ついでに、ここでは泥棒も決して逃げ切れない、との小話を聞いた。なぜって、走り出しても酸欠で倒れてしまう、からだという。私は「だけど、追いかける警

察官の方も、『ハアハア』じゃないの？」なんて切り返して、やりとりを楽しんだものだったが・・・。

放水が、いや話がそれた。

M氏は消防車についている消火用の機材について入念にチェック、日本のものと比較している。高層ビル用のはしごは 30 メートル(日本は 50 メートル)、排煙用のエンジンはホンダ(日本も同じ)、呼吸器や破壊機はこちらも日本もドイツ製。だが、日本が吸煙して蛇腹で外に出す＜そして火元を見つける＞のに対して、こちらでは煙そのものを吹き飛ばし排煙するという。消火ホースは日本のものよりやや細く、35 ㎜と 70 ㎜。材質はラバーで重いのに対し、日本は布で軽い。布は傷みも早いがすぐ取り替える。ホースごとのつなぎ目はネジを回す方式、大阪ははめ込み方式だ。

救急についても話は及んだ。だが、救急は病院と直接つながる救急機関が担当、必要な場合、現場で無線で連絡を取り合うのだという。

「ところで」と、M氏や私が定年になっているのを知って副署長が聞いてきた。

「日本の消防士の定年は何歳なのか？」

「一般企業、他の公務員も大体同じだけれど、原則的には 60 歳ですよ」

「だって消防士は敏捷な動きが要求される。そこまで年齢が届いたら、体が動かなくなるんじゃないか？」

「そう、だから高齢者は、基本的には運転手とか、保守・管理作業にあたることが多いんだ」

新庁舎に大阪消防署のエンブレムを

他の署員も話の輪に加わってきた。こちら二人が比較的若く見えたらしく、「日本人は一体、何を食べ、日常どんな生活を送っているのか」なんていう質問まで飛び出してきた。

恰幅のいい署長のロドリゲス氏は、途中で「市役所に爆発物がある」との緊急電話が入って出かけていたが、何もないとわかって戻ってきた。トレモリーノスの消防署の活動の紹介本それにエンブレムとキーホルダー、ネクタイピンを我々二人に渡すと言った。

「これから 1 年以内には、すぐ近くに新しい消防庁舎が完成する。そこには、世界の消防士のエンブレムをガラス枠に入れて展示することになっている。だが残念ながら日本のものがない」

M氏は声を弾ますように言った。「私はまもなく日本に帰る。大阪のエンブレムでよかったら資料と一緒にお送りしますよ」

約 1 時間、この間、署長宛の緊急電話以外は緊急出動もなく、我々も向こうの消防署員もお互いの説明とやりとりを楽しむことが出来た。日西のミニ民間交流と言ってもよいものだった。

後日談：

M氏が帰国してまもなく､約束したエンブレムや大阪消防署の活動紹介のパンフレットが私のもとに届いた｡私はそれにスペイン語訳をつけると､さっそく署長のところへ持っていった｡署長は相好を崩して言った｡

「さすがに日本人は早いねえ｡言ったことはキチンと実行するし｡エンブレムもちょうどタイミングがよく届いてよかった｡今､展示枠に各国のものを貼っているんだ」

そう言うと､部下にその一つを持ってこさせた｡エンブレムはヨーロッパやアメリカのものが多かった｡見た限りではアジアのものは一つも無かった｡ということは､大阪のものが“アジア代表”になるわけだ｡新庁舎のオープニングが楽しみではある｡

「白い村」ミハスを訪ねる

6 月 23 日　M夫妻とミハスを訪ねた｡バスはトレモリーノスの我が家の近くのバス停から出ている｡約 1 時間｡バスは曲がりくねった山道をゆっくり登っていく｡次第に展望が開けていく｡バスの後方眼下には､フェンヒローラの町が横たわり､その向こうに地中海が広がっている｡

最後のカーブを曲がるとバスは停車場に到着した｡前方には土産物店が道路に沿ってずらりと並んでいる｡世界共通の観光地での光景である｡その少し先には､観光バス用の大型駐車場｡更にその近くでは､観光用の馬車が列を作り乗客を待っていた｡

このバス停を基点にやや坂になった狭い道路と階段を上っていく｡日本のスペイン案内書に最も登場している典型的な「白い村」｡道路の両脇の家の壁はすべて白く､その壁に､鉢植えの花が美しく並んで咲いている｡大部分が赤色系統｡どこを写真に撮ってもそのまま絵葉書になる｡

「村」といっても､観光として訪問する箇所は､ほぼ 400 メートル四方の一角に収まっている｡きわめて狭い範囲である｡下からミハス市役所､ビルヘン・デラ・ペニャ広場､ミニチュア博物館､教会､郷土資料館､憲法広場､郵便局､切手・タバコ売り場､市場､展望台､もう一つの教会､闘牛場がある｡どの道路沿いにも土産物店､レストラン､カフェテリアなどが並び､銀行がいくつかある｡

一番高いところにある闘牛場は､スペインでは最小ということで四角い形をしている｡この日は､日曜日｡太陽の光が弱くなりかける午後 7 時から闘牛の本番があるという｡観客席にはＳＯＬ(日向)席と､ＳＯＭＢＲＡ(日陰)がある｡M夫妻は､スペイン観光の締めくくりとして､この闘牛を見学したいとして残った｡私たち夫婦は､かつてメキシコで闘牛を見たが､その残酷さに６頭の試合があるのを､２頭分だけ見て早々に引き揚げた経緯があるので､こちらは同席を遠慮した｡(闘牛を理解できなければスペインを理解したことにはなら

ないといわれる。スペイン人と闘牛文化――是非、一度は研究しなければならないテーマではある)

観光客の一番のお目当ては、なんといってもサン・セバスティアン通り（**写真右**）である。写真ポイントの美しい通りとしてどの案内書にも紹介されている。私たちも足を運ぶ。

それは、4 メートル幅ほどで 200 メートルほどの長さの、狭い傾斜のある遊歩道だった。この日は、直射日光をさえぎるためか、歩道には白い天幕がかかり、また近々フィエスタ(お祭り)があるのか、入り口ではその場で揚げたフライ料理を売っていた。

天幕の下を進んでいくと、子供たちがこの狭い歩道で 50 メートルほどの距離を徒競走していた。カメラを向けるとヒョッと振り向き、手をあげてなかなか愛嬌がいい。私も白い壁に植木鉢の花が並んだ光景をいくつもフイルムに収めた。

郷土資料館に寄って驚いた。そこにはまだミハスが観光地として開発される前の、農村時代の生活・耕作用具が展示されていた。ほぼ 50 年程前のものだろうか。それが自分の幼少期に育った信州・伊那谷でのものに実に似ているのである。万能グワ、鋤、家畜に引かせる耕作具等々。特に木造で手動の、穀物の実と殻を選別するトウミが、子供の頃、農作業を手伝った時のものにあまりにもそっくりなのに、どちらの国が模倣したのか、それとも、それぞれが独自に開発したのかと、なかなか興味深いものだった。

ここにも日本人観光客を主な対象とした土産物店があった。もちろん、ヨーロッパ、アメリカからの観光客にも人気があり、店には大勢入っているが、なんといっても日本語で買い物が出来、日本円で支払いも出来る、というところが、海外に出た日本人には安堵感を与えてくれる。

Ａｍａｐｏｌａ――「スペイン唯一、ミハスの押し花を使った手作りの店。日本語、日本円でどうぞ。お客様用のトイレあります」

ｅｎｅ／ｍｉｊａｓ――「ミハスブランドのＴシャツ専門店。日本語、日本円でどうぞ。トイレあります」

と現地の日本語の案内図に紹介されている。

Ａｍａｏｌａに寄る。日本人従業員のいかにも日本的で丁寧な応対が感じがいい。「毎月、どのくらいの日本人観光客がこちらに来るんですか」と、買った品物の代金を払いながら聞いてみた。

「え！月にですか？月というと良くわかりませんが、きょうも午前中に 3 台の日本人団体の観光バスが着いたんですよ」との返事。その数を推測すべし――。

そのほか、他の土産物店では、ガラス細工品、革製品、絵塗りの器等が目についた。それにしても、この日は特に暑かった。そのせいか、帰りのバスから見下ろすフェンヒローラの街と地中海は、霞がかかったようにかすんでいた。

夜、家に帰ってテレビのニュースを見て驚いた。昨日、同じコスタ・デル・ソルのリゾート地マルベーリャでは、ＥＴＡによるテロ爆弾が車に仕掛けられていたという。「エッ　こんな地中海岸の観光地域に？　なぜ？」

翌日、新聞をみて背景がわかった。ＥＴＡとは、スペイン北部のバスク州の独立運動にかかわる過激集団。ちょうど南のアンダルシア州のセビリアでは、ヨーロッパ・サミットが開かれており、そこに集っている各国の首脳またメディアに、自分たちの主張と存在を誇示したかったかのようだ。

一昨年の 9.11 のニューヨークのテロ事件を初め、今は世界のどこで何が起きてもおかしくない時代である。そしてそこには、日本人も居合わせていることが多い。これだけ海外旅行が一般化し、国際交流が多様化したなかで、日常的な状況掌握の大切さを改めて心に期したものだった。

スペインにも温泉があった！

うわさでコスタ･デル･ソルからそれほど遠くない地に温泉があると聞いたことがあった。スペインに温泉！？　温泉大好き人間にとっては聞き捨てにならない。本当だろうか？いつか是非その真偽を確かめ、ついでに入浴もしてみたいと思っていた。

機会は突然に訪れた。良く晴れ渡った 4 月 6 日の日曜日。マルベーリャに住む友人の誘いがあってその車で出かけることになったのだった。「疲れがよく取れますよ」。友人はすでに何回か訪れていた。

マラガから北西に約 80 キロ。車は時速 120 キロ以上で飛ばしていく。道路は日本よりも良く、制限時速の表示も 120 キロだ。沿道は一面のオリーブ畑。きれいに列をそろえて植えられたオリーブ畑が低い山の頂まで続いている。

幹線道路から田舎道に入り約 20 分。目的地に到着した。アラマ・デ・グラナダ。標高 800 メートルの小村。村から少し外れた川のほとりに湯治客用の小さなホテルが立っていた。

我々の目指すは川のほとりにある露天風呂。ホテルの湯と同じ湯元からのお湯を引いて、三つの浴槽に似た水溜が続いている。岩と石でせき止められ、底は砂利と砂である。一つに 5 人から 10 人ほどが入れる。

鉱泉。湯の温度は日によって少し違うようだ。この日は摂氏 40 度弱。やや低いが長時間つかっているには丁度よい。料金は無料。

先客にはスペインの地方からの若者たちが 6 人、子供連れが二家族。途中から一組の若いカップル、更に幼児を連れたドイツ人夫婦が入ってきた。川の 50 メートル程上流には橋

があり、観光客が珍しそうに眺めて通行していく。中にはカメラを向ける人もいる。男女混浴である。

まさに“露天風呂”です

「エッ　スペインってそんなに開けているの？」なんて一瞬疑い、すぐに「ナアーンダ」と残念に思う御仁もいるかもしれません。そう、水着を着けての入浴なんです。私はプールや海で使っている水泳パンツ。妻は、せっかくだからと私の勧めもあって、前日、いかにもスペインらしい明るい色の水着を買ってきた。

足を思い切り伸ばし、湯につかりながら遠方に目をやる。川のほとりの木々は新緑に萌え始めている。真っ青な空と燦燦とふりそそぐ太陽。地元、奥多摩の５月の渓流を思わせる。実に健康的だ。肌もすべすべになり、身体もすっかりほぐれたようだった。

温泉の成分を調べるところまではいかなかったが、ホテルの案内書によれば、すでにローマ時代から湯治として用いられていたようだ。

帰途の車窓からは、オリーブ畑と新緑の草原のはるか向こうに、真っ白な雪をかぶったシェラネバダ山脈が横たわって輝いて見えた。なんとものどかな日本の晩春から初夏の風情だった。

足(車)がないと少し遠くて大変だが、スペインにもこんな穴場があったこともご報告しておきたい。

伴侶、そして留守家族のこと

これまで自分のことばかり書いてきたきらいがあるが、海外生活では伴侶の理解と支えが非常に大切になってくる。幸いに妻の場合、私の仕事の関係でかつてパナマに一緒に住んでいたことがあることから、留学には前向きに同意してくれた。人によっては難しいこともある最も大事な最初のポイントで恵まれていたのはありがたかった。彼女は簡単なスペイン語会話は出来た。でも、込み入った内容の理解は無理である。

ここではテレビ放送も 7 局が映り、結構面白い番組もある。でも、スポーツ番組や純然たる歌だけなら、見たり聴いたりするだけでも楽しめるが、トークがはいった番組などは言葉がわからないため、ほとんど楽しめることはない。新聞、ラジオも同じである。その意味では、文化がありながら文化から隔絶されているともいえる。

こちらに定住している日本人で、パラボラアンテナなど特別な装置をつけて、日本の衛星放送を受信している人もいる。でも、そのためには定住場所と設備投資それに維持費が必要で、私たちにはまだ出来ない。せめて、日本からＯＣＳ(海外新聞普及会社)便で聖教新聞を購読している。値段は日本での 5 倍以上にはなるが発行日から２～4 日遅れで届く。「カルテロ(郵便です)」と言って、配達夫が押す玄関のブザーが鳴るのが楽しみとなっている。

こうした状況下、妻は私よりも厳しい環境の中に来西して、料理を初め、さまざまな面で

支え応援してくれるのに心から感謝している。
「心に残るとっておきの話」(　　出版社)の中にこんな話が紹介されている。
――抑留から久しぶりに帰った夫を迎えた妻。あらゆる工面をして料理を用意したが、好きな酒はどうしても手に入らなかった。そこでお銚子に白湯を入れて注いだ。妻の陰の苦労を察した夫は「美味しいよ」と一言。夫の両眼からは涙があふれていた。夫人の目からも堰を切ったように涙がとめどもなく流れ落ちた。夫妻の思いやりに満ちたやりとり――

現代の食材事情の良いスペインでは、買い物に苦労することは少ないが、それでも、「日本的なものを」となるとそれなりに妻も陰で苦労している。私自身は、このエピソードにある夫の心ほどには届かないかもしれないが、海外なるがゆえに、せめて外出は出来るだけ一緒に、と務めているところである。
一方、どちらかと言えば、たずなを締める役の妻は現実派で、サンチョ・パンサの役割を担っているかもしれない。なかには、こちらと日本と別居生活をしながら、往来し合っている夫婦もいる。大事なことはお互いの理解と支え合いだろう。
もう一つは留守家族である。三人の子供のうち、息子はすでに結婚し、日本の家には二人の娘が残っている。子供たちも、パナマ滞在の経験があることもあって、私たちのスペイン行きにはすぐに賛同してくれたが、親として子供のことが気にかかるのは当たり前。幸い、三人とも健康で元気に働いているが、それでも心配になって時々電話を入れている。電話料も結構かさむが、お互いの状況を知らせ合い、励まし合う必要不可欠の費用でやむを得まい。それでも、ｅメールを活用することでずいぶん節約は出来ている。海外では老いも若きもインターネットなのである。

「コスタ・アミーゴス」の会が発足

最後に、コスタ・デル・ソルに在住する日本人のことを紹介しておきたい。定年後、こちらで年金生活をしている人、また現役で仕事をしている人等、それぞれ自身の生活設計と目標を持ちやっている。そうした日本人間の情報交換と親睦をはかるために、一昨年「コスタ・アミーゴス」との会ができた。
それぞれがボランティアで、スペイン語の勉強会や絵画、俳句の会なども開催していてなかなか活発である。妻も日本では押し花の学校に通っていたことがあるので「皆さんにも教えて差し上げたら」と勧めたこともある。でも、こちらでは材料（乾燥剤）が揃わないということで、まだ実現には至っていない。それでも、手もとの限られた材料で作った十数個の押し花は、スペイン人の病気見舞いに、知人の引っ越し祝いに、また母国に帰るマラガ大学の学生にプレゼントされると、「なんてスバラシイ！」と大変な好評を博したものだった。これも、ミニミニ“民際外交”と言えるかもしれない。
会はで季刊誌も発行。いつかは地元の市民行事にも参加したい、との計画もある。素晴ら

しい夢だと思う。私も、季刊誌に小文を寄せ、定例会では、現役時代の体験を生かした、皆さんのお役に立てる話をさせてもらったこともある。

欧米では、熟年夫婦が海外でロング・ステイをするのは当たり前。コスタ・デル・ソルではどこに行ってもヨーロッパからの白髪､銀髪のカップルが仲良く手を組みながら歩いている。イギリスやドイツ、スウェーデンなどからの退職移住者の数に比べれば、日本人は極めてマイノリティ(少数派)ではある。でも、日本でも少しずつ、ロング・ステイが静かなブームになりつつあるようだ。世界各地にある日本人のロング・ステイ地域の中で、「コスタ・アミーゴス」のこうした試みはきっとパイオニア的なものの一つではないか。事務局の方々の日常の努力とご苦労に感謝しているところである。

主婦の目に映ったスペイン

「定年になったらスペインへ」と、夫が言うのをかなり前から聞いていましたから、それなりの心の準備は出来ていました。なんといっても、海外での気がかりは、治安と食べ物そして健康です。幸いに、住んでいるトレモリーノスは心配ないのですが、マドリード等の大都市は、最近、日本人がよく被害にあっているということで、訪れるときはずいぶん緊張します。

食べ物は魚も野菜も新鮮で美味しく、それに安いので、主婦としては大助かりです。一時帰国して、東京のスーパーに食品の買い物に行ったとき、千円札が何枚もアッという間に出ていってしまうのに、あらためて日本の物価の高さを知らされたものでした。こちらでは、二人分の食材の買い物で 10 ユーロ(約 1300 円)を超えると、相当の量を買った感じになります。

言葉の不自由さは、外国にいる限りやむをえませんが、周りの人も何とか聞いてくれようとしますので助かります。髭もじゃの男性から頬にキスをされるのにもようやく慣れてきました。

地域のボランティア活動みたいなものを、とも思っているのですが、やはり言葉の壁と、現地の事情がよくわからないことから、まだ踏みとどまっている段階です。

こちらでは道具が揃わないので、皆さんにも教えて上げられないのですが、私の手持ちの器材を使い、現地の花を使って作った押し花は、自分で言うのもおかしいですが、大変に好評で、病気見舞い等で差し上げた方にも喜んでいただいています。海外に出るときは、そこの国の人に伝えていける、日本的で何か自分の得意なものがあると、きっとステキだろうなあなんて思っているところです。 (清水由紀子)

私の語学取り組み体験

これから留学をされようとしている方、また、これから語学に本格的に取り組もうとしている若い方も含めて、少しでも参考になり、お役に立つことが出来るならばと、いまだ未熟な自分の語学力を承知の上で、私の語学修得に関する体験をご紹介したい。

現在、私はマラガ大学でスペイン語の勉強をしているが、大学(早稲田商学部)時代の第二外国語はドイツ語だった。スペイン語については、大学を卒業してＮＨＫ学園高校の教諭(商業科)を務め、その後、聖教新聞に入ってしばらくたった頃、必要性を感じて独力で勉強を始めた。中南米関係の記事が増え始めていたのに、スペイン語のわかる人が社に誰もいなかったからである。

一時は、スペイン語が出来る人を探しては翻訳をしてもらったりしていたが、相手も都合のあることだし、時間も費用もかかる。“ なんとか、ある程度のものは自分で出来るようになりたい ” との思いから、決心し始めたことであった。

34 歳で初めてスペイン語に取り組む

当時 34 歳。大学卒業後すでに十年近く経過、記憶力も下り坂になっている時である。全くゼロからのスタート。特にスペイン語は動詞の変化が難しい。そこで、週 2 回、2 時間、スペイン語教室に通って文法を勉強、後はＮＨＫのラジオ・テレビ講座、参考書による独習をしていた。

ところが、10 ヶ月した頃、急きょ、パナマに特派員が必要との状況が生じてきて、たまたまスペイン語をやっていたことから(むろん、他の要素からも検討されたと思うが)、私が派遣されることになったのである。

パナマに着いてから約 2 年間、仕事の合間をぬって現地のスペイン語教室に通った。クラスの仲間は、アメリカ、カナダ、フランス、インド、中国とそれぞれパナマに駐在しているビジネスマンやその夫人たちだった。教材のテキストはすべて英語で解説されていた。担当教師の説明も当初は英語、やがてスペイン語のみになった。当たり前のことだが、ここでは日本語は全く通用しなかった。だが、結果的にはそれが良かった。思えば、まがりなりにも英語が出来たのは、大きな救いだったといえる。

その後、現地の機関紙の編集の応援をする必要から、支局のすぐ近くにあったパナマ大学の新聞学科に聴講生として、週 1 回 2 時間、１年間学んだ。これは、編集のほかにも社会事情やさまざまな表現の仕方を知る上で役に立った。

語学は「やる気」と「根気」以外にない

さて、英語については、自分なりに言えば高校時代からかなり勉強してきたほうだと思う。

一般に英語の読解力については日本人はレベルが高い。だが問題は会話力である。現在、ラジオ、テレビの語学放送、テープ、語学学校、各種参考書と、巷には語学教材が氾濫。更には「××週間で話せる英会話」といったハウ・ツウものも街にあふれている。だが、私個人の体験から言えることは、そんなに安易にことが運ぶことは決してありえない。語学は「やる気」と「根気」以外の何物でもない、ということである。ちなみに、ＮＨＫの語学番組テキストの販売部数は、毎年４月を頂点にして、急下降のカーブを描いているという。

学問的なアドバイスはその道の専門家にお願いするとして、私は聴解力のアップのために、電車・バスの中をはじめ、歩行中も英語のカセットテープを手放すことはなかった。誰も通らない路上では、耳から入った文を大きな声を出して再唱した。長時間のイヤホーンで時には耳が痛くなった。同じことの繰り返しに飽きて、吐き気をもようすようなことさえあった。でもともかくやりぬいた。一方、英語のテレビ番組、映画等、時間の許す限りそれらに触れた。そしてつかんだ結論は「語学に王道はない。ただ“やる気”と“根気”のみ」ということだった。一生のうちのある期間、“これほどまでに集中したことはない”と思えるほどの努力が必要だと思う。

英語圏の国に住んでいるからといって、決して自然に英語が上達するわけではない。本人に意欲と実践がない限り向上はありえない。逆に日本の田舎にいても、本人に“やる気”さえあれば、語学上達の道はいくらでもあると思う。

外国語の大切さについては、今更ここで触れることもないと思うが、インターネットをはじめ、世界がますます一つになりつつあるなかで、その重要性は飛躍的に高まっていくのは間違いない。国として国際舞台で発言力を高めていくためにも、企業として海外に発展していくためにも、外国語に堪能な人材の育成は不可欠の条件となってきている。

ちなみに――太平洋戦争の開戦後まもなく、米海軍は全米の大学から知能指数の高い青年を集めて日本語の特訓をした。猛烈な集中講義のおかげで、彼らはごく短期間で日本語の新聞を読み、草書も映画も理解できるようになった。二千人の卒業生の中には、ドナルド・キーンなど多くの知日派や、日本との友好交流に深いつながりを持つようになった人がいた。戦時中、「敵性語」として英語を排斥した日本がアメリカに勝てるわけはなかった。

50 歳を過ぎて再び英語に挑戦

パナマから帰国して本社の外信部で仕事をしていた時、住む地元では、米軍横田基地のＳＧＩ(創価学会インタナショナル)メンバーの応援をしていく立場になった。昭島市が基地のある福生市とすぐ隣りであることと、なんとか英語が出来るから、との事情からだった。

とはいえ、アメリカ人メンバーからの相談に乗り、満足のいく激励やアドバイスが出来るためには、それまで以上の語学力が必要なことが痛感された。「自分の英語力がアップした分だけ、皆に役立ち貢献していくことが出来る」が実感だった。そこで、再び、今度は英語の勉強を始めた。刺激になるからとＴＯＥＩＣや英検も受験した。50 歳を超え、髪もかな

り薄くなった自分のような受験者は、なかなか見当たらなかった。でも、若者との切磋琢磨は、文字通りこころよい刺激となったものだった。

一昨年 3 月、定年となり時間が自由になると、私は基地の中にある「セントラル・テキサス・カレッジ」に入った。週 2 回、各 3 時間ほどの授業だったが、せっかく縁のあるところで、英語と共にアメリカ文化についても理解を深めることが、メンバーの考え方をより理解するのにも有用だと思ったからだった。

ここに入るのに、今度はＴＯＥＦＬの成績が要求された。そこで再び、その試験に挑んだ。この結果、これまでに受けた三種類の試験の到達点は、ＴＯＥＩＣ　835 点、ＴＯＥＦＬ(コンピュータ・テスト)210 点、英検　準 1 級　となった。

目標のあるところに挑戦の意欲がわき、若者から受ける刺激は、自分への大いなる励ましともなった。それは、マラガ大学でスペイン語を学ぶ今、より強く実感しているところである。

定年からスペイン語の完成を目指す

定年になってなぜ今更スペイン語を？　まえがきでも触れたが、時間的に自由になった今、これまでの体験、積み重ねを最も効果的に生かし、自分の更なる成長を図りながら、所期の目的に貢献したい、との思いからである。

また、「ドン・キホーテ」について本格的に取り組んでいくのに、スペイン語をもっと深めておく必要もあった。もちろん、原書は、現代スペイン語とは異なり難しいが、ドン・キホーテが訪れた舞台を訪ね、地元の人々と交流、いろいろな話を聞きだすのに、言葉と共にスペインの文化事情や歴史を勉強しておくことも求められるからだった。

スペインの仏教徒たちと

それに、横田基地のアメリカ人メンバーに対してそうだったように、こちらのスペインのメンバーに少しでも役立っていけるためにも、言葉の研鑽は欠かせない。

かつて、青年の育成に心血を注ぐ世界的な教育者から、語学の修得に関して、次のような励ましの言葉を聞いたことがあった。

「使命を自覚したとき、才能の芽は急速に伸びることが出来る」。これは、未来を担う中・高校生に贈られたものだが、語学に限らず、また中高年の人にとっても当てはまると思っている。また「『学ばずは卑し』との言葉がある。学ぶ人は成長の人であり、謙虚の人だ。学ぼうとしない人は停滞の人であり、慢心の人だ」との言葉も胸に留めている。

今度は、機会があれば、日本での「スペイン語検定試験」にも挑んでみようと思っている。

留学実現のために

はじめに

留学については、さまざまな案内書があるので、自分の目的にあったものを、求められると良いと思う。大きな書店には「留学コーナー」もあり、専門の情報を提供している。また、留学斡旋の専門機関もある。熟年向けの短期語学留学、海外生活体験と現地の言葉を学ぶショート・ステイを募集している機関もある。時間のある年金生活者には、海外ロング・ステイのなかで留学体験を、といったケースもある。学校の研究や手続きが煩わしいという方には、そこで留学体験をされるのも一つの道である。この場合、ほとんどの準備をその募集機関でしてくれるので、余り手をかけなくてすむ。

私の場合、ロング・ステイのケースに入ろうが、自分の体験をもとにしながら、参考になる点を綴っていきたい。より専門的なことや詳細については、専門誌や留学情報サービス機関から資料を得たり、確認することをお願いしたい。

１．　留学の準備

まず、海外で何をしたいか決めることが第一である。語学について言えば、自分が今までに知っている外国語を更に深めようとするのか、それとも新しい外国語を勉強しその国の文化に触れてみようとするのか。

あるいは肩肘を張らずに、憧れの国でちょっと暮らしてみたい。そのために、生活に必要な言葉くらいは勉強しておきたい。現地の人々と交流ができるようになりたい。その国の文化について知りたい――でも大いに結構と思う。

語学留学の場合、留学生を募集している大学、機関だったら年齢には関係なく基本的にはどこでも入れる。入学時に各自のレベルに合わせてクラス分けが行われるからである。

一方、言葉の土台のある人は、日本での成人向けの大学または大学院のように、その専門科目を外国の大学(院)で研究することも出来る。ただし、この正規留学には出身大学の成績証明書ほか、各種の書類を要求され、かなり難しいことが多い。そんな場合、自分の必要な科目のみを履修する「聴講生留学」といった道もある。

芸術的なもの、例えば、ギターとか彫刻や絵画、バレエや民族舞踊などは、その手の専門学校に入学することになろうが、現地で個人教授について習うといった留学方法もある。

次は留学する国や都市を決めることだが(先に行きたい国や都市を決めてからでもよい)、何をしたいかが決まればおのずと集約されてくるだろう。その際に考慮すべき点としては：①生活費が高くないこと、②治安の面で安全であること、③医療等の面で安心できるところ、等があげられる。

私の場合：本文中でも触れているが、スペイン語をもう一歩深めて現地の人々と交流し

たい、また「ドン・キホーテ」を研究したい、との目的だった。各国の定年退職者が住むスペインのコスタ・デル・ソルに住居を決めてから学校を決めた。マラガ大学付属の外国人向けスペイン語コース。各期（夏季コース、通年コース）とも授業開始に当って、レベル分けの試験が行われた。大学の文学部にも、聴講生留学について確認したら、1 年間の留学は可能とのことだった。

また、自宅(賃貸アパート)では、週 1 回、先生に来てもらいギターの練習をしている。先生は、すでに何枚かのＣＤを出し、演奏会も開いているプロだが、リーズナブルな授業料（1 回 1 時間 12 ユーロ）で教えてくれている。音楽の専門用語が出てきてわかりにくいこともあるが、“ ギター留学 ” 兼スペイン語の勉強で、一石二鳥と意識して取り組んでいるところである。

生活環境について言えば、現在の居住地は、①から③まで、ほぼすべての条件を満たしていて、ありがたいと思っている。生活費については、「コスタ・デル・ソルでの生活」での項で紹介しているように、日本よりはかなり安くついている。治安については、スペインの大都市、マドリードやバルセロナなどは、最近、悪くなっているが、地方都市であるトレモリーノスやマラガは、夜間の外出でも基本的には問題ない。幸いに、まだ一度も病気になったこともないが、一般的にスペインの医療水準は高く、救急医療体制もよく整っている。

２．入学の準備

留学したい国、学校の候補が決まったら、その準備である。一般に留学実現までには、次の準備段階を経ることになる。

① 情報・資料の収集と検討
② 希望する学校の入学案内書を取り寄せる
③ 必要書類をそろえて出願
④ パスポートやビザの取得
⑤ 渡航の準備

資料や情報は、留学関係の出版物や留学情報サービス機関のほか、当該の大使館(領事館)で手にいれることが出来る。学校の候補が決まったら、入学案内書を取り寄せ熟読する。学校に手紙を出すことや、送られてきた案内書もすべてその国の言葉で書く(書かれている)わけだが、留学の夢の実現のためには、その苦労も即、言葉の勉強になってくると前向きにとらえたい。もっとも、留学斡旋機関や、熟年向けの短期留学を募集している機関を通せば、その煩わしさは省けることもある。

入学案内書では、各項目を確認する。まず入学資格に問題はないか。次に学校の授業日程。大学付属のコースや公立の語学学校は学期制か通年制であることから、入学時期に合わせることが必要。私立校の場合は、毎月入校が可能になっている学校が多い。

次いで授業料や宿泊費。特に、宿泊については、学校側が手配してくれるのかどうか。その場合、どんな宿泊形態(寮、アパート、ホームステイ等、食事はつくか、自炊か)。そして、これらの費用をどのように支払うのか等々。マラガ大学の場合、宿泊先については、学校側で留学生の希望条件に合うような物件を紹介してくれる。その他にも、校舎内に展示コーナーがあり、宿泊引き受けの案内や、学生同士が共同生活をするための呼びかけの掲示もあり、結構活用されているようである。一般の私立学校でも、学校側が住居の手配をしてくれるケースが多い。

いったん払った登録料や授業料の払い戻しは認められないことが多い(あるいは、何割か減額される)ので、注意が必要だ。

パスポートは、出入国の際に必要のほか、滞在中の公的な身分証明書ともなる。3 ヶ月以上の長期留学を予定している人は、学生ビザ申請の際、必要なので早めに取っておくこと。パスポートをすでに持っている人は、有効期限が切れていないか確認を。留学予定の期間を超えていることが望ましい。

申請は、原則として自分が住民登録している都道府県の旅券課で行う。有効期間が 10 年(新規発給手数料 1 万 5000 円)と 5 年(新規発給手数料 1 万円)がある。土・日・休日を除いて 1 週間から 10 日間かかるので早めに申請しておいたほうがよいだろう。

ビザについては、国によって異なるので、大使館(領事館)に確認する。一般に学生ビザの場合、申請書、パスポート、写真、健康診断書のほか、留学予定の学校の入学許可証、往復の旅費と現地での滞在費が十分にあることを保証する書類を求められることが多い。大使館によってまちまちだが、かなり日時のかかる国もあるので、早めの申請を勧めたい。

必要な条件や書類が整ったら、現地までの航空券の手配をする。運賃は航空会社、チケットの種類によって相当の違いがある。事前に良く調べ、もっとも効率的なチケットの購入を心がけたい。

海外に旅行または居住する際に心配なのは、万一病気になったり、怪我をしたりしたときのことである。現地での入院や治療は日本では考えられないほど高額になることが多い。そこで、出発に当っては、必ず海外旅行傷害保険に加入しておくことをお勧めしたい。保険料は保険金額と保障期間によって決まってくる。基本契約のほか特約等の保証のあるものが多いので、各自の状況・目的に合うものを選ぶとよい。

お金について

これは授業料や生活費の一部をすでに振り込んであるか否かによっても異なるが、留学にはかなりのまとまったお金が必要である。そのお金を安全に持っていき、管理する工夫が大切だ。

まず、トラベラーズ・チェック(旅行小切手)。落としても盗まれても他人には使えず、再発行もしてくれるという便利なものである。これを購入するのには、１％の手数料が必要。

加えて、現地で両替をするときに、銀行や両替所によって規定の手数料を取られることもある。安全性の高いトラベラーズ・チェックは是非、上手に活用したい。

クレジットカード。大きな買い物や、ホテル宿泊のさい等に、多額な現金を持ち歩かなくてよいので便利である。一種の身分保証の機能も持つ。いざというときは、カードでキャッシングも出来る。

それと当面の現金である。現地に到着し生活を始めるまで、汽車、バス、タクシーなどの交通費や小さな買い物や食事代、場合によってはチップも含めて、細かな費用がかかる。出発の際の日本の空港、または現地に到着の際の空港でも両替することが出来るが、あわただしい中でのことでもあるので、なるべく、トラベラーズ・チェックを購入の際、銀行で両替しておいたほうがよいだろう。

現地事情に合わせた携行品を

留学先への荷物は少ないほど楽である。現地で調達出来る物は現地で、と考えるほうがよい。ただし、衣類等はサイズが合わないケースもあるので、自分にあったものを持参する。電気製品は、日本と電圧が違いそのままでは使えないことが多い。留学する国の電圧を確認し、変圧器とアダプターを持参する必要がある。

また、常備薬や化粧品もなるべく自分にあったものを。一般に、外国の薬は日本のものより強く(日本人の体格が小さいことからもくる)、そのまま服用すると思わぬ副作用があることもある。

食事については、せっかく外国で生活するわけだから、その土地のものを食べ、食文化を味わうようにしたい。でも、「時には日本の味を」という人は、味噌、醤油、真空パックの漬物類、のり、梅干、乾燥野菜など、あまりかさばらない程度に持っていくとよいだろう。留学先が在住日本人の多い都市なら、かなりの日本食も手に入るが、値段は日本よりはるかに高くなる。中国系の食品店でも一部の日本食品を扱っていることが多い。

荷物は航空会社によって異なるが、普通、手荷物のほかスーツケースなど 20 キロまでは無料。それ以上は超過料金を徴収されることが多いので、急ぎでない重いものは、船便等で送る工夫をしたい。

以上、これらの持参品のすべてについてチェックリストを作ってみるとよいだろう。

私の場合：生活する土地の選択が優先したので、学校はおのずとその地域にあり、クラス編成、教育内容、歴史や伝統からして信頼できるマラガ大学となった。

パスポートはすでに有効期限が切れていたので、妻と一緒に 10 年のものを申請した。ビザは、いわゆる「年金者ビザ」だったので、かなりの書類を必要とした。

①査証申請書、②写真 4 枚、③スペインへの入国日から起算して 120 日以上有効のパスポート、④無犯罪証明書、⑤大使館作成の雛型に基づいた健康診断書、⑥年金受給資格を証

明する証明書(国民年金・厚生年金証書――スペイン語訳を付け、外務省のアポスティール認証を受ける)、⑦居住予定地域のスペイン人と同程度の水準及び家族と住むのに適当な広さの住居が用意されていることを証明するもの、⑧全危険をカバーする海外医療保険に加入していることを証明する保険証書(英文またはスペイン語文)等。書類によっては原本のほか何枚かのコピーが必要となる。(時々、内容が変わることがあるので、ビザを取得されようとする方は、必ず当該の大使館から最も近時の情報・指示を受けてください)

この中の⑦については、日本では無理なので、2 月にアパート探しと契約書の作成のために 10 日間ほど渡西した。その際に、大学も下見し、学校案内と入学申請書類も手に入れた。アパートは三軒ほど候補物件を回ったが、たまたま在住の日本人の紹介で、安心できる所にスムーズに決まったのは幸いだった。

この下見旅行は、その後の生活設計を練る上でもなかなか価値的なものとなった。2 月という旅の閑散期だったため、格安航空券で、ロンドン経由マラガまでの往復が約 7 万円。5 月の渡西は、妻と往路だけの券だったが、やはり格安航空券で約 10 万円だった。その後、一時帰国もしたが、日系の航空会社で「里帰り便」とか家族の「呼び寄せ便」といった航空券を出していて、旅の繁忙期を除けば、10 万円以下で往復が可能である。

海外旅行傷害保険については、すでにビザ申請の際に必要だったので、妻ともども 1 年間のものに入った。

お金は、長期的には年金の銀行送金に頼るとして、当面の生活費として、ユーロのトラベラーズ・チェックと現金を 7 対 3 の割合で交換して持参した。おりしも、昨年からスペインを含めたヨーロッパの大部分の国の通貨がユーロに統一されたのは、なんといっても便利だった。(スペインの通貨はそれまでペセータ)。参考までに、ユーロについては、トラベラーズ・チェックのほうが現金よりかなり交換率が良いので、最低限必要な現金以外は、トラベラーズ・チェックに交換することをお勧めしたい。

5 月の渡西にあたっては、荷物は二人でスーツケース 3 個だった。アパート(大き目の１ＬＤＫ)が、いわゆる家具付きで、寝具、来客用の食器類まですべて整っていたので、衣服ほか身の回り品、留学の資料、それに若干の日本食品、常備薬、それにスペインには無い電気釜と、パソコンにも使えるトランス、アダプター(スペインは 200Ｖなので 100Ｖに変換が必要)を持参した。

３．現地での諸手続き

現地に到着したら、まず学校の事務所に行き、事務的な手続きのほか、受講するコースやスケジュールの確認をする。長期の場合、ここで滞在許可証についてのアドバイスも受ける。一般に 90 日以内の短期留学であれば、“ 観光 ” 扱いとなり、居住滞在に関する手続きを必要としない。しかし、それ以上の場合には、留学生用の滞在許可証を申請することになる。

国によって申請に必要な書類が異なるが、スペインの場合次のようになっている。

申請書(居住地の警察署にある)、パスポート、学生ビザ、証明写真、入学許可証または在学証明書、経済証明、住居証明、保険契約書、健康診断書、申請手数料の振込みの際に渡される領収書。同じ学校にすでに入学している日本人学生がいれば、いろいろとその経験から教えてもらうとよいだろう。

また 90 日以上、長期に滞在する人は、現地の日本大使館または領事館に在留届を提出する。不測の事態が起こったときや緊急時に、在外公館からすみやかに連絡や保護を受けられるからである。大使館、領事館の窓口に備え付けの用紙に必要事項を記入し、写真と一緒に提出する。

私の場合：学校はすでに 2 月に下見をしてあったので、5 月にスペインに到着するとすぐに大学に行き、6 月から始まる夏季コースの登録をし、学生証を受け取った。学生証は対外的にはあまり使うことは無いが、大学の図書館や各施設を使うのに必要となる。

滞在許可証については、年金者ビザだったので、日本のスペイン大使館から戻ってきた書類を持って、まずトレモリーノスの市役所に行き、次に地元の警察署に行き、申請した。警察署には都合 3 回通った。妻ともども、滞在許可証ができるまで約 4 ヶ月かかった。

４．楽しい留学生活へのヒント

勇気をもって発言しよう

いよいよ留学生活のスタートである。少々の緊張と興奮と不安が入り混じるかもしれない。外国での生活を少しでも有意義に、楽しく充実したものにしていく秘訣は何か。それはあくまでも本人の積極的な姿勢にかかっていると思う。学校での勉強も大事だが、まずは話し相手となる友人を多く作っていくことである。

一緒のクラス仲間は、あちこちの国からやってきている。考え方も、生き方も、文化もそして宗教も違う。それぞれ母国語は違うが、語学留学の場合、学ぶ言葉は共通である。こちらが十分に出来ないと思っていても、実は相手もほぼ同じレベルにあることが多い。日本人は、自信がないと、遠慮して控えめになってしまう傾向が強いが、彼らは文法的に少しばかりおかしくても、堂々と発言する。

大学のクラスでも、何人もの先生から言われた。「日本人は日本人だけで固まってしまう傾向があり、あまり他の国の人と話そうとしない」「文法はわかっているようだが、会話の時間でもなかなか発言しないので、何を考えているかわからない」。

外国語なのだから完璧に出来なくて当たり前。勇気をもって発言していくことが特に大切だと思う。間違っても当たり前。誤りは直してくれる。話さなければ損である。

現地に溶け込む努力を

次に、生活を始めてみるといろんな面で勝手が違い、現地の悪い面のみが目につくことがあるかもしれない。

「×××は日本のほうがはるかに進んでいる。こんなんじゃしょうがないなあ」

「×××のサービスもなっていない」

・・・・不満ばかり並べても、何も解決しない。その国にはその国の、その地方にはその地方の伝統や習慣、やり方があり、それがその国・地方に合っているのである。それに溶け込み、そのリズムに乗っかってしまうことである。

私も、スペインに来た当初、昼食が午後 2 時、それから 4 時または 5 時頃までのシエスタ(地方また企業によって、シエスタの無いこともある)、そして 5 時ごろから 8 時または 9 時頃まで仕事、というリズムになかなかなじめなかったが、今は一日 30 分ほどのシエスタをすると、あとがすっきりとして勉強や各種の活動の能率が上がって、なかなか良いものだと実感している。

旅に出て見聞を広める

日常の留学生活は、かなり多くの宿題が出たり、予習、復習で結構忙しい。それをきちんとすること自体が、留学の目的達成に通じているわけだが、更に一歩進めて、せっかく外国に住んでいるわけだから、出来るだけ現地の文化に触れたり、現地の人との交流の輪を広げていきたいものだ。語学留学であれば、即、実践の場ともなり、机上では学べない、まさに生きた外国語を使う醍醐味を味わうことが出来る。またよい気分転換にもなるだろう。

学校によっては、「文化コース」または「研修コース」として、近場の見学や旅行をカリキュラムの中に加えている場合もある。学校にそのようなコースが無くても、週末または学期間の休みは、旅に出る絶好のチャンスである。日本のガイドブックに載っているような観光地を訪れてみるのも、クラス仲間や現地の友人から聞いた穴場を狙ってみるのもよいだろう。その国の言葉や文化を学んでいる留学生なら、見方も多角的でより深い鑑賞をできるにちがいない。

マラガ大学では、近場の文化史跡の見学や、セビリア、コルドバ、グラナダ（アルハンブラ宮殿）など、バスで数時間の日帰り旅行が毎月 1 回程度、組まれている。希望者のみの参加だが、学校の行事として他のクラスの生徒も一緒になるので、友達作りや交流の輪を広げる機会にもなる。しかも、その部門の専門の先生が引率同行するので、観光バスのガイドにはない、より深い説明を聞くことも出来る。

健康管理に留意して

最後に、外国生活で大事なのはなんといっても健康管理である。留学中に病気になったり怪我をしてしまったら、当初の目標も崩れかねない。留守家族にも心配をかけてしまう。出発前にしっかりと健康診断を受けておくのが大前提である。それでも留学地の気候、風土、また生活習慣、食べ物の変化等で体調を崩すことが無いとはいえない。

国内でも同じだが、まずはよく食べ、よく眠ることである。食事時間が不規則になるのもよくない。スペインの場合、仕事の時間帯、シエスタ等の背景もあって、夕食時間が日本と比べてかなり遅い。スペイン人向けのレストランが開くのは 8 時過ぎ。混んでくるのは 10 時過ぎ。各家庭での夕食も 9 時過ぎが多い。

私の場合、日本ではふだん夜 8 時前には夕食を済ませ、それ以降は出来るだけ何も食べないようにしていた。これは、極めて健康的でよかった。スペインに来た当初、10 時過ぎの夕食はお腹にもこたえ、睡眠、翌朝の体調にも影響した。そこで、食事だけは“日本タイム”でやっている。

一方、運動不足にならないために、また精神・肉体両面のリフレッシュを兼ねて、トレモリーノス市が主催しているテニススクールに週２回ほど通っている。夜８時から１時間。明るい夜間照明のもと、地元のスペイン人と一緒に思いっきり汗を流すのは、実にさわやかで気持ちよい。翌日のクラスでも元気で調子がよくなる。「タケシはなんでそんなに元気なんか！？」なんて、声もかけられるほどである。

また、定年になってから、初めてゴルフも始めてみた。現役時代は考えても見なかったが、なかなか面白い。新たな交流の場も出来た。スペインに来ることが決まって、よく調べてみると、コスタ・デル・ソルはヨーロッパのゴルフのメッカである。マラガ県の地中海の海岸線に沿って 30 以上のゴルフ場があり、なかには世界的な大会も開かれる著名なゴルフコースもある。年間を通して温暖で雨も少ないので、愛好家には最適地。料金も日本よりはるかに安い。そこで、私もこちらの日本人また外国人と時々コースに出るようにしているが、これもよい気分転換となっている。

病院では領収証を

万が一、病気になってしまったら、周囲の人の助けを借りることだ。同居人、隣人や家主、または通っている学校の先生や事務局の人に聞き、状況に合った病院や医師を紹介してもらう。薬局で近くの病院を教えてもらうことも出来る。

たまに、「病状を説明できるように日本語のわかる医師を」と探す人もいるが、海外でそのような医師にめぐり合えるのは、極めて稀と考えた方がよい。留学先は基本的には、いわゆる先進国が多いと思うが、そうした国の医療事情は日本とあまり変わらない。病院にいけば何とかなる。それよりも早く対応、手当てこそ大切である。

それと、海外傷害保険に入っているケースがほとんどだろうから、病院では必ず領収証をもらっておこう。後ほど、かかった医療費の請求に必要となる。

ゆとりがあるなら、事前に何回か現地を訪れ、ホームステイや体験入学などすることも不安を和らげる一助になるだろう。とはいえ、慣れ親しんだ文化を離れ、何事においても恵まれている日本の生活から未知の世界に飛び込めば、最初は戸惑いも多いだろう。食事も人づき合いも違う。その上、言葉が十分には通じない。現実は、必ずしも期待通りというわけにはいかないこともあるかもしれない。でも、たじろがず「この苦労も留学生活から得る糧」と前向きにとらえ、工夫し努力していくなかに、次の人生の舞台もまた開かれていくに違いない。

すでに飛鳥時代から留学生が・・・

その昔、中国側の記録によれば、飛鳥から平安時代にわたる当時の日本からの遣唐使、留学生の総数は2142人にものぼっている。遣唐留学生の一人、安倍仲麻呂は長安で死去した。

「天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし　月かも」

この古今和歌集の句からは、望郷の思いと使命感に燃えた悲壮な決意が伝わってくる。当時は、いつ帰れるとも知れない荒海を船で渡って留学した。今は、飛行機がある。電話がある。インターネットがある。そう思っただけでも、ずいぶん気持ちが楽になるのではないだろうか。

よく学び、よく遊ぶ、そして社会に貢献できる何かに生きがいをもつ。これが「定年留学」を楽しむ秘訣のひとつではないかと思う。

あ　と　が　き

まだ留学生活は続く予定ですが、ちょうど１年経過したところで一度まとめることにしました。リポートを読んで、言葉の面を気にしていらっしゃる方もいると思います。たしかに私の場合、その点では恵まれていました。すでにある程度、海外生活に慣れ、外国語の基礎があったことが、各種の交流の場を広げてくれたとは思います。でもその一方で、これまで外国生活の経験のない方が海外に出たときには、言葉の面での苦労はあるでしょうが、私よりはるかに新鮮な感動や驚きを経験できるかとも思います。

文中でも述べていますように、定年になってから新たに外国語に取り組んでいる方も大勢います。例えば、少し前「60 歳からの挑戦――スペイン語手習い」との本を自費出版された茨城県のＳさんは、約 1 年間にわたってスペイン、グアテマラ、コスタリカの 3 カ国で、初歩からスペイン語の勉強に取り組んできました。しかも、帰国してから、現地でお世話になった先生へと、この日本語の本を今度はスペイン語へ翻訳し、それをまた本としてまとめているのです。

また、一時期、行動を共にした奈良県のＭさん夫妻は、留学ではありませんが、トレモリーノスに 3 ヶ月間滞在の間に、ここを拠点に意欲的に各地を訪ねていました。「カタコトの英語もやっとやけど、それでも楽しくやってますワ」。好奇心旺盛な生き方に、こちらが刺激されたものでした。

定年後、もう一つ充足感がない方には、もう一度勉強することをお勧めします。その一つが海外留学です。仕事人生では経験したことのない新しい世界が開けてきます。日本や日本人の生き方を、外側から見つめなおすことも出来ます。

英語の知識のある方は、それを土台に次の段階のことが出来るでしょう。新しい外国語を習い、その国で快適な生活を送るために、最低限、必要な言葉を覚える、ということでもよいでしょう。また、自分の専門や趣味の勉強でもよいでしょう。あるいは、そんなに硬く考えずに、国内では体験できない刺激を求めて、ただ海外生活をしてみたい、だけでもよいでしょう。人生 80 年代――。留学は、残り約 20 年のための“ 再充電 ”ともなります。

夢が、志が人を創ります。大きな夢と志は大きな人生を創ります。自分を高めていくもの、自分を貧しくさせていくのも、この心次第だと思います。世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことが一杯あります。そんな異質な文化や生き方に感動し、啓発され、自らの世界が広がるのが、留学の一面とも言えるでしょう。

今、国内の新聞や雑誌にも、定年後の生き方に関する事例や体験が多く載るようになってきました。

『還暦過ぎたら大学へ行こう』『大人はもう一度学ぶ』『老春時代真っ最中』『７０代から７７カ国へ』『今、熟年世代に新たな生き方のうねり』『海外移住する高齢者たち』・・・最近の新聞紙面の見出しの一部です。今や、留学も若い世代の独占物ではなく、経験豊かな熟年

世代にも大いに開かれていくべきだと思います。そんなシニアの便宜のために、イギリスやカナダへのシニア専門の短期留学を募集しているような企画もあります。

高齢者が元気で生きがいに燃えている。それが社会の活力になります。その生き方が前向きで、社会のプラスになるか、あるいは後ろ向きで、社会の負担になるか。出来ることなら「奉仕される」より「奉仕する」姿勢を保ち続けたいと私は思っています。人生の満足は、自分がどれだけの人を喜ばせたか、幸せに出来たかにかかっているからです。

これまでは、子供を商業主義の犠牲としながら、親よりも子供を優先してきた傾向もありました。これからは、年長者がもっと積極的に社会にかかわっていく時代、残った自分のスネを太らせながら、今度は自分のために使う時だと思います。人生に定年はありません。60 歳を過ぎてから、自分で自分を育てていく創造的な生活がスタートするともいえます。

大きなビジョンを持つこと、そして勇気ある行動です。「やりたい」と思ったときが旬です。日本人は他人の目を気にし過ぎます。「ねばならない」との固定観念からの開放、私の内なる心の構造改革こそ大切なのです。

終わりに、こちらに居住し学ぶことを受け入れてくれた我が愛するスペインの国、そして親子以上に年齢差のある自分を受け入れ付き合ってくれた各国の若い仲間、大学の先生や関係者、また我が“ 夢 ”についてきてくれた妻、留守を預かってくれた子供たち、更に、どこまでも前向きな生き方を教えてくれた創価学会そして池田名誉会長に心から感謝したいと思います。

本書が、定年後の留学に関心を寄せられる皆様に、何らかのお役に立てば、こんなうれしいことはありません。私自身は、大学を終わると、いよいよドン・キホーテの軌跡を訪ねての旅に出かけます。その後は、少し働いてお金を貯めたら、世界の名作の舞台を訪ね歩く予定です。“ 東京のドン・キホーテ ”の見果てぬ夢は続いていきます。

2003 年 7 月

筆者略歴

清水　武（しみず　たけし）
1941 年長野県に生まれる。早稲田大学商学部卒業後、ＮＨＫ学園高校教諭として勤務。この間にソ連を訪問。69 年聖教新聞社に入社。76 年より 10 年間、同紙特派員としてパナマに常駐、北中南米およびヨーロッパの 32 カ国を取材で訪問する。帰国後、本社外信部担当部長、創価学会国際室総務部長を経て 01 年に定年退職。02 年にスペインのマラガ大学に留学、現地の文化事情の紹介等にもあたっている。